

295  
317

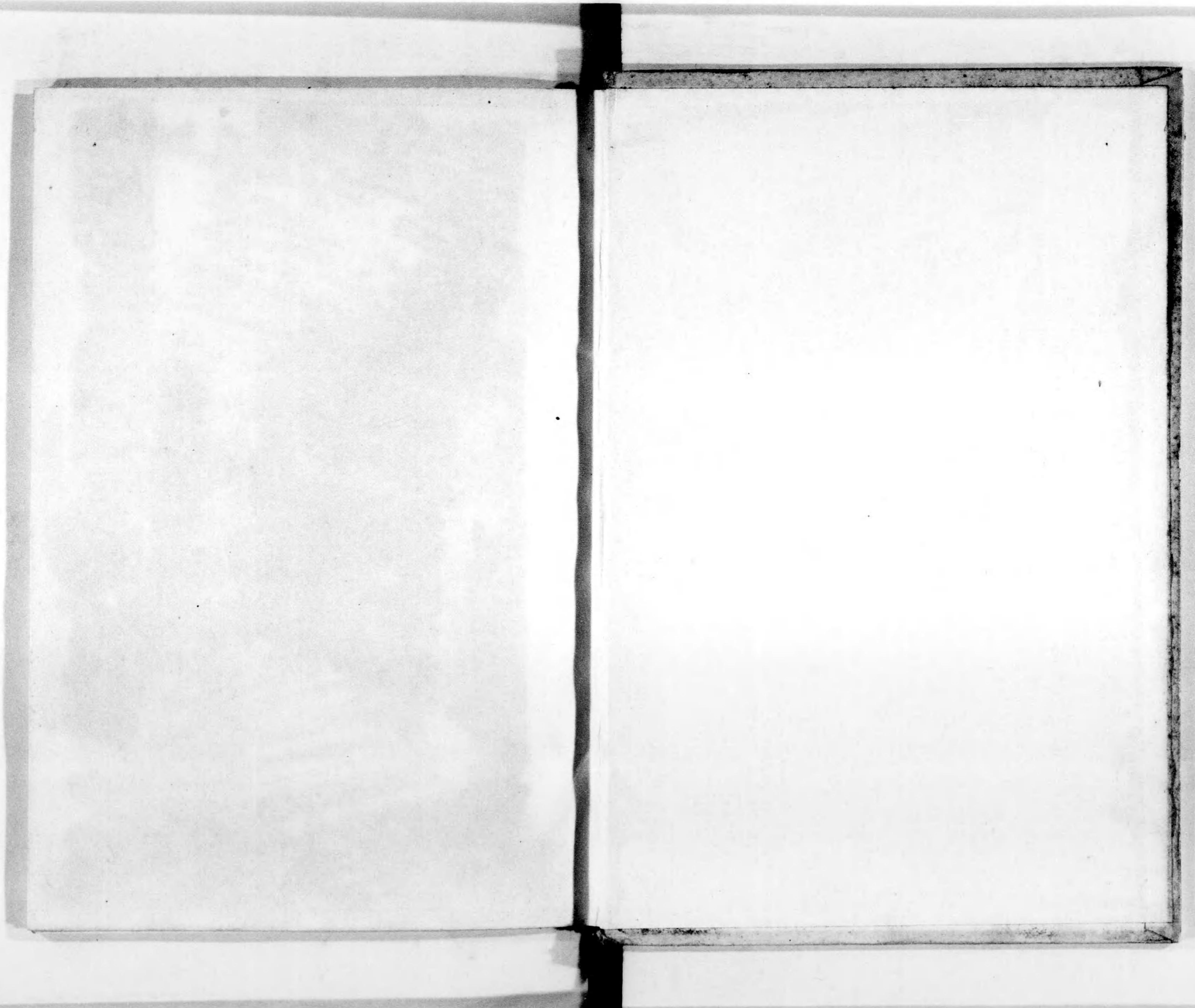
實説  
あわゆき

著巖碎泉今

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup>/<sub>m</sub> 1 2 3 4 5

始





實説あわゆき



大正今泉碎巖著

15. 9. 20

内交



伊東深水畫伯筆

深井五

雪子の辭世

おられれ身をまきおきまはるる  
いつのころかまはるる

細いけれど

戀瀬の川は

つきぬ流れが

頼もしや

戀瀬川でも

早にや痺る

瘦りや河原の

片流れ



川瀬戀るれ流を里の「きゆわあ」

## はしがき

最近茨城縣下に於て、可憐なる少女が男の無情を恨み、その家の井戸に身を投じて、夢なき最後を遂げた哀れな物語がある、世間に有り勝ちな失戀の出來事であるが、私は之れを單なる三面記事としてのみ見ることが出来なかつたのである。

それはこの少女の死が餘りに勇敢であり、餘りに深刻であり、餘りに美であるからだ。

彼女が意志的に自殺した行ひは實に永遠な人間の涙をさめぐと垂れしめるものがある。

殊に篇中の書簡、日記、辭世、遺書等は何れも原文の儘であつて、悲痛なるその一字一句は如何に讀者諸氏の腸を抉ぐるであらう。

本書は、此の哀れなる少女を弔ふ手向草に……………

彼が運命の涙の跡を書き綴つた事實の手記であつて、敢て現代に新らしきと新らしからざるとの小説的價値を求ようとしたものではない。

只熱き同情の涙の一滴を本書の上に濺がれんことを希ふものである。

あ  
わ  
ゆ  
き

目  
次

8	7	6	5	4	3	2	1
學 <small>まなぶ</small>	扶 <small>たす</small>	幼 <small>わらわ</small>	一 <small>ひと</small>	散 <small>ち</small>	飛 <small>ひ</small>	留 <small>とど</small>	父 <small>ちち</small>
び		な	壺 <small>か</small>	り			の
の	助 <small>たす</small>		の	ゆ	守 <small>まも</small>		出 <small>で</small>
通 <small>かよ</small>		同 <small>どう</small>		く			
路 <small>ぢ</small>	料 <small>りょう</small>	志 <small>し</small>	骨 <small>ほね</small>	花 <small>はな</small>	報 <small>ほう</small>	宅 <small>たく</small>	征 <small>てい</small>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
(三)	(六)	(五)	(二)	(一五)	(一〇)	(五)	(一)

あわゆきのつもる思ひを胸に秘めて  
消えし去にけりあわれ君はも



きゆわあ

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
悶 <small>もん</small>	恒 <small>つね</small>	彌 <small>や</small>	忍 <small>しの</small>	堅 <small>かた</small>	頼 <small>たの</small>	義 <small>ぎ</small>	溪 <small>たに</small>	夢 <small>ゆめ</small>	仇 <small>た</small>	七 <small>しち</small>	眞 <small>まこと</small>
ゆ	夫 <small>つま</small>	生 <small>なま</small>	き	み	理 <small>り</small>	間 <small>ま</small>	の			月 <small>つき</small>	實 <small>じつ</small>
る	の	ぶ	手 <small>て</small>	の	の	の	一	し		十	の
	結 <small>むす</small>	の	と							六	
胸 <small>むね</small>	婚 <small>こん</small>	空 <small>そら</small>	影 <small>かげ</small>	手 <small>て</small>	人 <small>ひと</small>	柵 <small>しほり</small>	巖 <small>いわ</small>	卷 <small>くわん</small>	女 <small>をんな</small>	日 <small>ひ</small>	愛 <small>あい</small>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
(一四七)	(一四三)	(一三七)	(一三三)	(一二七)	(一二三)	(一一七)	(一一五)	(一〇五)	(一〇一)	(九七)	(九三)

きゆわあ

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
心 <small>こころ</small>	故 <small>こゝろ</small>	憤 <small>いん</small>	呪 <small>のろ</small>	畑 <small>はた</small>	文 <small>ふ</small>	父 <small>ちち</small>	夢 <small>ゆめ</small>	辻 <small>つじ</small>	土 <small>つち</small>	せ	戀 <small>こひ</small>
			ひ						民 <small>たみ</small>	瀬 <small>せ</small>	
	の	郷 <small>きやう</small>	の		の		占 <small>うらな</small>		の	ら	の
			暗 <small>くら</small>								
鏡 <small>かがみ</small>	よ	怒 <small>いか</small>	示 <small>し</small>	打 <small>うち</small>	使 <small>つか</small>	聲 <small>こゑ</small>	想 <small>おも</small>	賣 <small>う</small>	子 <small>こ</small>	ぎ	堤 <small>つゐ</small>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
(八六)	(八一)	(七六)	(七三)	(六九)	(六三)	(五九)	(五五)	(五〇)	(四五)	(四一)	(三六)

目

次  
終

49	48	47	46	45
天 <sup>てん</sup>	白 <sup>しろ</sup>	静 <sup>しず</sup>	遅 <sup>おそ</sup>	白 <sup>びやく</sup>
	木 <sup>き</sup>	か	衣 <sup>い</sup>	
		な	の	
	の	部 <sup>ぶ</sup>		
國 <sup>くに</sup>	柗 <sup>びつ</sup>	屋 <sup>や</sup>	足 <sup>あし</sup>	姿 <sup>すがた</sup>
.....	.....	.....	.....	.....
(二二七)	(二二三)	(二二八)	(二二三)	(二〇九)

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
濡 <sup>ぬ</sup>	噫 <sup>あ</sup>	罪 <sup>つみ</sup>	思 <sup>おも</sup>	後 <sup>のち</sup>	花 <sup>はな</sup>	行 <sup>ゆき</sup>	最 <sup>さい</sup>	怨 <sup>うら</sup>	謎 <sup>めい</sup>	絲 <sup>いと</sup>	解 <sup>と</sup>
れ	!	は				衛 <sup>ゑ</sup>	後 <sup>のち</sup>	恨 <sup>くら</sup>		の	け
	二	重 <sup>かさ</sup>	ぬ	の	の				の	切 <sup>き</sup>	ゆ
た	十	變 <sup>へん</sup>				の	の	の		れ	く
袖 <sup>そで</sup>	年 <sup>ねん</sup>	ね	事 <sup>こと</sup>	涙 <sup>なみだ</sup>	骸 <sup>なみから</sup>	闇 <sup>やみ</sup>	夜 <sup>よ</sup>	鐵 <sup>てつ</sup>	石 <sup>いし</sup>	目 <sup>め</sup>	雪 <sup>ゆき</sup>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
(三〇五)	(一九九)	(一九四)	(一九〇)	(一八六)	(一八三)	(一七七)	(一七三)	(一六七)	(一六三)	(一五六)	(一五三)



# 1 父の出征

著者は今この物語を綴るに當つて、先づ思ひ出の緒を繰り展げねばならぬ。

——それは丁度明治廿七年——時恰も日清戦争に際して、我が三千萬同胞の胸は、義勇奉公の一念に燃え立ち、世は征清の聲に怫然として湧き返へれる時であつた。

東京より北へ二十餘里、筑波山の東を通ずる陸前濱街道に舊き國府の面影を遺して、城廓の如く軒を並べし石岡の街々にも、その赤き血潮は漲り渡つて、道ゆく三尺の兒童等も

膺てや懲らせや清國を

清は御國の仇なるぞ――

と、聲高らかに歌つて行く。

此時豫備の軍籍に在りたる石田熊次は國家の召集に應じ、今や干城の重任を双肩に擔つて、勇ましくも出征の途に就くべく、泥にまみれし野色着を軍服と着更へつゝある處であつた。

妻の都喜子は傍らにあつて、その身仕度に心忙しい。

「貴方！ これは石岡の金刀比羅神社の御護符！ どうぞ肌身離さず御つけなすつて……」

「ウム！ それは忝けない、あの崇高なる神様は、屹度そなたに代つて、この俺を守護つて下さるであらう……」

熊次は妻の手よりその護符を恭しく押し戴いた。

身仕度は成つた。

土臭き逞ましき骨格は、いつか燦然たる軍服に纏へられ、鋤鍬揮はれたその腕には嚴めしき軍刀が握られた。

「都喜子よ！ 支那人は云はゞ蕪大根も同然……ナニ日頃のこの腕ですつぱりとやつて見せるぞ……ハツハ、ハ、ハ……」

熊次は晴れやかに笑つて、やがて儼然と膝を正した。

「さらば……都喜子よ！ 後の處はよく頼み置きますぞ……奥々も雪子のことを……俺のこの體は、もう君に捧げた命ぢや、再び歸り來るとは思ひますな……」

必死を期した夫の言葉に、都喜子は一時思ひ亂れて、しばし言葉もなかつたが、やがてきつと意を決して云つた。

「ハイ……それは、もう、とうに覺悟いたして居ります……どうぞ貴方こ

そー 軍人としての體面を重んじ、天晴れ本分をお盡し下さいませ……これが、私としての御願ひで御座います、後の處は決して御心置きなく……」  
「ウムー よく云つて呉れた、武士は己れを知るものゝために死す！ 男子君命を受けて戰場に立つからには、骨を劍にしても鴻恩に報じて見せるぞ！」  
流石は軍人であり、その妻であつた。

その時、祖母に抱かれて居た、まだ一歳の雪子は、母の手に移され、やがて父の軍服の手に抱かれた。

「雪子や！ 御父さんは、これから彼方へ行つて、澤山御土産を持つて来るからね！ それ迄は御母ちゃん、柔順しく待つて居るだよ……」  
と、心ゆくまでの頬ずりを試みたが、雪子はたゞ無心に微笑めるのみであつた。

やがて堵の如き町内の人々と、雷の如き歡聲とに送られて、熊次は家を出で

た。  
都喜子は雪子を抱いた儘、門口に見送つて、紅葉の如き雪子の手に紙の小旗を翳さしめ、  
「萬歳！」  
と、一聲叫ばしめた。  
そして、夫の姿と、旗の影と、遠く、遠く、見得ぬまで、じつと、じつと、見送つて居たのであつた。  
あゝ！ 今にして思へば、これぞ、永遠に相逢ふ日のなき袂別であつた。

2 留守宅

心淋しき留守宅の最も頼みとして居るのは夫よりの音信であつた。又、出征の

夫としても、故國よりの便りであり、わけて雪子の事に就いてゐつた。  
(郵便！)

と、投げ込まれる度毎に、都喜子は心躍らすのであつた。  
嬉しうてゐるか？ 否、否、夫の安否を氣遣ふてゐる。

(前略)

小生出發の際は何かと御心盡しの程御禮申上候、行々、萬歳聲裡に〇〇  
着、それより〇〇丸にて無事基隆に到着いたし候、これ偏に金刀比羅神社  
の御守護及びそなたの御心盡しの事と感謝いたし居候。  
然して〇〇港解纜の際には流石に名残惜しまれ、甲板に出で、は暫し故山  
を眺め申候。  
當方、身體至つて頑健、御安心下され度候。  
終りに時下嚴寒の候、そなたは申すに及ばず、御両親様を始め雪子の身體

に御注意下され度候。

二仲、御序での節、雪子の寫真御送付方御願申上候——(下略)

都喜子は読み終るや、ホツとして父母に向つた。

「あの夫から手紙が参りました——無事臺灣に着いたから安心して呉れつて

——それに雪子の寫真をよこしてと書き添えてありました」

「ウム……やれやれ——婿殿には無事に着きなされたか！ それはまアよか  
つた。都喜子や、雪子の寫真ならすぐ送つてやつたがい——」

「ハイ、それではすぐ撮影つて送つてやることに致しませう」

それから間もなく故郷の近況などを細々と書き添へて、雪子の寫真を送り届け  
たのであつた。

波濤を越えて幾百里——臺灣なる熊次の手に渡された時、その喜びは譬ふるに  
ものもなかつた。

然し、光線の工合であらうか、左の眼が少し小さく寫つて居たのには、何よりの氣懸りでならなかつた。  
熊次は早速手紙を出した。

(前略)

御手紙いつもながら懐しく拜見いたし候、御兩親様を始め皆々御壯健の由安堵いたし候。

さて雪子の寫眞正に落掌、大分大きくなりましたね。

寫眞によれば左の眼少し小さく、悪い様に思はれ候が、流行眼でも患らひ居るには無之哉、治療代は谷向の實家より何程にても支出いたさすべく候間、全治まで眼醫者へ御つれ下され度候。

小生はこれから南下いたし、臺灣島の土賊共を一刀兩断の下に成敗いたすべく、いづれ功名話しは次便に申上ぐべく、これにて失禮。

基隆にて

熊

次

懐かしき故郷の

都喜子どのへ

手紙を読み終るや、都喜子は静かに目を閉ぢた。

夫の南下と聞いて密かに案じたのである。

「南無——金刀比羅様！ 我が夫に特別の御加護を垂れさせ給へ——そして

戦さの捷ちます様に……夫の身に負傷のない様に……」

と、誠を神に念するのであつた。

雪子の寫眞に就いては、

「乾板に疵があつた爲めに變に寫つたのです。決して眼には別條はありません

ん——」

と、書き送つたが、熊次はそれを信せぬのであつた。  
あゝ！ 妻を——子を——又は夫を思ふの心は、譬ひ百千の山河を距て、居様  
とも、少しも變りはないのである。

3 飛 報

號外賣の鈴の音にも留守宅人の胸は波打つ——

「皇國の戦は何うであつたらうか、

負傷者は何う？

もしも夫にでも……南無——金刀比羅様……」

と、其の度毎に神を頼むのであつた。

x

x

x

x

基隆に上陸した熊次の一隊は〇〇大佐に率ゐられて宜蘭へ南進した。

〇月〇日、遙かに南湖大山の高嶺を望む〇〇地點に到着した時は、已に蠻賊と  
戦火は開かれて、白き砲煙は濛々として宜蘭の一天を掩ひ、日光を遮る大森林  
は微かに震え慄いた。

熊次は一隊と共に、この戦闘の前線に立つて、奮戦激闘、悍惡なる賊を撃ち、  
或は掃ひ、向ふ所天晴れ日本男子の武勇を示し、揮ひ持ちたる鋭き銃劍は、蠻  
賊の度膽を寒からしめた。

然し、この宜蘭の戦ひは、皇軍にとつて最も苦戦であつた。

彼等は巧みに出沒する蠻人獨有の戦術を用ひて、飽く迄も頑強に抵抗を續け  
その放ちたる毒矢、小弾は少なからず味方を傷けしめたのである。

「憎くい！ 土賊共……今に目に物見せて呉れるぞ」

熊次の一隊は、今日こそ奴輩を一撃の下に粉碎すべく、とある小高き丘の後ろ



に散兵線を敷いて、最後の號令を待った。

それと知つてか、蠻賊は遠く竹林の蔭に、蕃舎の背に、兵力を集めて爆竹の如く、盛んに發砲を初め、大膽にも大槍、大刀を振り翳して一氣に我軍を襲はんとした面憎さ——。

熊次は銃を執つて身構へた。

ヒユツ——ヒユツ——と敵弾は土砂を飛ばして、耳元を唸つてゆく。

「ウヌ！ 猪口才な……やつちまへ……」

今や勇氣と怒りに張り切つた一隊は、號令一下——忽ち一齊射撃を食らはした。

熊次も同じく銃身に狙ひをこめて撃ち出した。

一弾——又一弾——美ん事、賊を射ち仆して、再び狙ひを定めんとする時しもあれ、賊の一弾は空を切つて熊次の胸を貫いた。

「畜生！ やつたな……」

熊次は仆れんとして叫んだ。

「石田——どうした」

戦友が馳せ寄つて、彼れを抱き起さんとするや、あわれ、第二弾は見舞はれた。

「チエツ！ 残念ツ！」

熊次は再び叫んで仆れた。

軍服のポケットは裂けて、金刀比羅神社のお護符と時計とが、鮮血に光つて見えた。

「石田！ 石田！ 傷は浅いぞ——しつかりしろ」

戦友は顔に口をすりよせて、勇氣を勵ましたが、熊次は只唇を震はせ、

「天皇陛下萬歳……」

の微かな聲を遺して遂に眼を閉ぢた。

「石田！ 如何にも無念だらう！ 憎くきあの土賊共！ 必然、怨みを晴らし

てやるぞ、石田！ 安心せえ……」

戦友は死骸に外套を被せて、はらくくと落涙した。

ふと天を仰ぐ時、味方の突貫の聲であらう、関は四邊をどよもして聞えた。

「石田！ 戦は大勝利だぞ、

貴様等の犠牲によつて、日に背く逆徒は掃はれた、その血によつて皇土は擴

げられた、

石田！ 俺は貴様が羨しい、

花の九段の靖國に、神と祀らるゝ貴様の幸が羨しい、

オイ、石田！ 何とか言はんか！ 俺もこれから南進して、戦死の場所は違

つても同じ社に祀られやう……」

戦友が絶つて嘆いても、熊次に再び言葉はなかつた。

「石田！ 俺は貴様の仇を討つまでこの臺灣に滞まる、貴様は骨となつて生の

故郷へ歸れ、そして懐しい妻や子の涙に生きる……」

友は再び涙を流して、彼れを吊ふて去つた。

斯くして戦功を立てた熊次の英魂は、永久の天に歸り、身は臺灣の土と化し

た。

時は四月十二日！ 蕃界の野末に沈む夕日は血の如く滲んで、暮風は骨に寒か

つた。

#### 4 散りゆく花

町とは名のみ、その頃の貝地町は、謂はゞ石岡町の部落であつて、僅かに五十

戸足らずの人家が、一つ一つ、木森と生垣に圍まれて、往來に宿らしく列んで居るばかり……。

石田の家は、この閑静な高濱街道を南へ、一寸入り込んだ日當りの宜い處にあつた。

この地方の農家の通有として、茅葺の屋根が高く、畠のある屋敷が廣い——。兵崎山の頂を離れた、美しい朝の太陽が、庭の敷藁の上に、とろくと陽炎を燃え立たせて、彼方の木立に、此方の藪に、鶯の聲が聞える、のんびりとした春の日であつた。

都喜子の實父、正兵衛は、暖かい南縁に餘念なく新聞を見て居た。

年の頃は四十二、三、頭は白髪に見えても、まだ身代持ち盛りの鋤鉞揮ふ身とて、色は眞黒である。

老母のお米は、末子お美代を背負ひ、藁のぼつた草履を穿いて、庭の日向を歩

いて居た。

都喜子は椽端に在つて、雪子に乳を吞ませ、妹のお朝は、その傍に繪本などを見て、柔順しく遊んで居た。

新聞を折り返しながら、正兵衛は獨言の様に云つた。

「……新聞の様子では、いつも味方の大勝利だ……」

國は大きくも支那人の野郎、から意氣地がないな……」

「お父さん、……して日本の方には別して變りでもありませんか……」

都喜子は、突然、口を開いた。

田舎女の血色の良い顔にも、流石に不安の色が浮んで見えた。

「別して變りはなからう……」

この新聞の様子では、戦死者も少ない様だ……都喜子、心配はするな、熊次の體には、そら金刀比羅様がついて居るでねえか……、まあ雪子でも大

「きく育てるのが、何よりお前の務だぞ……」

「ハイ……」

都喜子は、これ丈けを云つて口を噤んだが、何となく氣遣しげに見えた。

丁度其所へ、さく／＼と敷藁を踏む音がして入り来たのは、隣字の畑作であつた。

「ヤア、今日は……大分いゝお天氣になりましたナ……」

「マア、誰かと思つたら畑作さんであつたか、さア何うぞ、此方へ上つて、ゆつくりお茶でも呑んで行きなされ……」

「イヤ、正兵衛様、それには及ばねえだ、……一寸、今此處を通りかゝつたもんだから、お寄り申したが、あの婿殿には別して變りはありませんねえだかれ？……」

「ハイ、ハイ、毎度難有う御座えます、熊次ですか——御蔭様で變りがある處

じやありません、イヤ、もう何時もながら、味方の大勝利でナ……」

正兵衛は、嬉しそうに笑顔を見せた。

「それは、マア、結構なこと……」

と、話はそれから——それへ——田畑の事に及ぶのであつた。

雪降る國へ雁が歸つて幾旬日——。

海を南の臺灣から、飛燕の便りは悲しかった、突如——悲報はあつた。

(熊次——名譽の戦死す)と。

「あゝ……」

一族のこれを聞いた時、

忽ちにして悲しみの底の底に、沈んで、何の言葉も出なかつたのであつた。

「……………」

「……………」

「あゝ！ お父様、お母様！

世の中には、神様も、……………佛様も……………真心も……………、何にもありませんのね——」

都喜子は斯う云つて、力なく首を垂れて了つた。雪子も、母につれて泣き出した、お米、お朝も、聲を立て、泣き崩れた。

正兵衛は、端座した儘、只静かに目を瞬くのみであつた。

一家は、夕暮の迫るをも知らず、涙と歎息とに時を移した。

庭の櫻の梢には、いつか愁はしげに曇つた月が昇つて、この一族に暗い悲しみの影を投げた。

咲き亂れた櫻の花が、風もないのに、ひらくと枝を離れた。

花は所嫌はず、正兵衛の頭に、都喜子の髪に、雪子の頬に散るのであつた。

折しも響く照光寺の鐘に、櫻の花が又一しきり亂れ散つた。

### 5 一壺の骨

「これ！ お前等は、何を女々しう泣くか、

軍人が戦場で死ぬに何の不足がある、

軍人としてこれに過ぎる望があるか、

君に對して、これに優る忠義があると思ふか……………」

正兵衛は一人叫んだ。

「云はゞ、稻が實つて、鎌で刈らるゝ様なものだ、

喜べ！ 喜べ！

熊次は、よう死んだと喜んでやれ、

身、土百姓に生れて、しかも

天子様の御召により、これ程の忠義を盡す……お前等は何と思ふか知れんが、俺は忝けなくてなんねえのだ……」

果ては正兵衛の目にも、怪しき露は光つて見えた。

涙の中に幾日か過ぎ、幾夜かは明けて、熊次の遺骨の着く日はなつた。

あゝ、國に捧げし益良夫の昨日の英姿が、今朝は一壺の骨となつて、石田家に運ばれし時、家人の悲嘆は如何ばかりであらうか。

當時、二歳であつた雪子の片言交りに、

「父！ 父！」と

呼ぶも、いと哀れに、如何に居合す人の顔を反けしめし事ぞ。

正兵衛は一壺の骨に向つて、恭しく容姿を正して云つた。

「婿殿——熊次殿！」

ようぞ、斯程の功勳を樹て、下された、

これこの通り御禮を申し上げますぞ……」

都喜子も思はず進み寄つて、

「モシ貴方！ 變りまして御目に懸ります、

……貴方にとつては、何も申し上げる事は御座いませんが、唯妾として、

心亂るゝ事の悲しうてなりません。

貴方！ 雪子も此頃は、あやせば笑ひます……それが妾は可憐しうてなり

ません」

と、云ひも終らず、顔に袖を掩ふて泣くのであつた。

「まだ籍が入れてないから……」との、理由の下に、葬儀は熊次の實家なる石岡町大字谷向江畑家にて営まれた。

當日は二歳の喪主、雪子が位牌を手にしつゝ、家人に抱かれ、會葬の人を見廻しては、につこりと微笑んだので、時ならぬ野路の村時雨は、又しても葬送の人の袖を濕ほしめた。

葬式を済まして後、正兵衛は、

「雪子が成人して、熊次の石碑を立てる時は、その下にこれを埋めよ」と、一片の骨を分ちて、佛壇の抽斗に納めしめたのである。

今も石岡より谷向へ通ふ人は、道路に面する畑の中に、一基の墓碑を見るであらう――

これぞ！ 功勳を後世に遺し、國に殉じた熊次の勇魂を弔ふそれである。

爾來――星霜三十轉――

昔、徒らに蒸して、時に春雨細やかに、碑面に獻献するを見るのみである。

### 6 幼な同志

思へば「運命」ほど残酷なものはない。

まだ此の世の何物も知らぬ幼児の、温き母の懷ろに抱かれて、乳房をのみ探るに何の罪があらう！ 何の咎があらう！

二なきその父を奪つて、永遠に二度と逢はしめぬは、そも何の報ひぞ！

かくとも知るよしもなき雪子の、泣くにつけ、笑ふにつけ哀れは増さるゝのである。

荒き浮世の波に風に、觸れしめずとて、愛しみ、育みし母の心勞は一通りではなかつた、かゝる中にも年月はめぐりくつて、雪子が五歳の春となつた。  
熊次の實兄――龍一は長男定一を伴つて、石田家に訪れた。

お米は懇懇に奥座敷へ通した。

定一は上らうともせず、庭の櫻の樹の下に、遊んで居る雪子とお美代とを早くも見つけて駆け寄つた。

定一はお美代と同じ年の六歳である。

「雪ちゃん、何してゐるの……」

「あのね、今お美代ちやんと、お墓を拵へてゐるの……」

「エッ、あの叔父ちやんの？」

定一は可愛い、眼を瞞つて、きよとんとした。

「エ、そうなの、父ちやんが臺灣へ行つて戦いで死んだから、妾、お墓を拵へて、お花を上げてやるの……」

定ちやん、彼方の石ころを持つて来てお呉れ、それからお美代ちやんはあの花を取つて来て頂戴ね……」

雪子の心は年より早熟で居た。

二人は云はるゝ儘石と花とを持つて来た。

櫻の花は咲いて、散つて、年月の幾度か移り變れど、悲しい日の追懐は小さい雪子の頭脳にも去らなかつた。

「定ちやん！ 有難う……」

雪子は小さく砂を盛つた上へ石ころを据へた。

そして、お美代が取つて来た、花すみれをその前へ捧げた。

「さア、皆んなで、拜みませう」

雪子は小さな手を合はして拜んだ、お美代もそれに倣つた。

定一も一緒に拜まうとしたが、思ひ出した様に、

「嫌だ、嫌だ、こんな嘘つぽのお墓なんか、俺ア家の本當のお墓にお参りするもの」



「あら、定ちゃん！」

と、雪子は定一の顔を見上げた。

「谷向には本當のお墓があるんだつてね……」

定ちゃん、今に兵隊さんになつたら、父ちゃんの仇を討つてお呉れ、ね！」

「ウム、今に陸軍大將になつて、支那人坊をサーベルで皆な斬つちまう……」

と、小供ながら雄々しく小さな肩を聳やかした。

「本當にね、悪い支那人坊を斬つちやつてお呉れね！」

雪子とお美代は、さも頼む様に定一の手へ取絶つた。

三尺に足らぬ子供にまで敵愾心は燃えて居た。

7 扶 助 料

庭に面した奥座敷。

正兵衛と龍一は對座して何事かを談じて居た、折々吐月峰を打つ煙管の音も聞える。

「扱て——」

龍一は改まつた語調で、

「例の扶助料の件ですが……」

「ハイ……」

正兵衛は煙管を啣へた儘答へた。

「……正兵衛様！ 貴方の御話は尤もです、熊次は其方へ差上げたに違ひありませんが……未だ籍も入れてありませんし、先年の葬式だつて當方で營つた位ですから、扶助料は實家へ寄越すのが至當かと思はれます」  
正兵衛は目を閉ぢた儘考へた。

「扶助料！ 扶助料！」

金額は兎も角、畏くも天皇様からの下賜れもの、世にこれ程勿體ないものがあらうか、又、これを争ふ程醜いものが又とあらうか……」

正兵衛は心密かに斯う思つたが——口には何事も云はなかつた。

「正兵衛様！」

龍一が再び斯う言葉をきり出した時、庭椽に慌しい音がして、雪子と定一が駆け上つて來た。

「おぢいちゃん！」

定ちやんがね、こんな嘘つぽのお墓なんか嫌だなんて、妾が折角拵へた父ちやんのお墓を足で壞はしてしまつたの」

「何！ 定一が……悪い奴だ——」

龍一は一寸怖い目をして定一を睨んだ、そして急に優しい目付をして、

「雪子や、勘忍しておやり」

「お伯父ちゃん！」

いゝのよ！ その代り本當のお墓にお参りしてやるつて……

それにね！ 定ちやんは、今に陸軍大將になつて、お父ちやんの仇を討つて

呉れるんだつて……嬉しいね……」

雪子の可憐らしい言葉に、お米と都喜子は女だけに臉を拭ふた。

龍一と正兵衛は、無言つて雪子を見やつた。

「お伯父ちゃん、何んに來たの？」

雪子は突如に云つた。

此頃、よくお伯父さんが來るので、或る日、母に訊ねたことがあつた。

「それはね、今度天皇様から、お父さんにお金を下賜れたの、それを谷向で呉れろつて云ふの……」

と、聞かされた、母の言葉を覚えて居るので、

「もしや！ あの事でも……」

と、かん付いた程、雪子は賢しかった。

「雪子や！ お伯父さんか？お伯父さんはな！」

正兵衛は云はうとしたが、云はずに了つた。どうせ、こんな子供に話した處で何になるかと思つたからであつた。

「谷向でも……あんまりだわ——妾と云ふ子まであるのに——」

これが五歳の雪子の口から出た言葉であつた。

「こら！ 雪子！」

正兵衛は叱つたが、一座はそのいとしまに涙ぐんだのであつた。

その結果、扶助料は谷向と雪子の家とで等分することになつたのである。

### 8 學びの通路

斯かる中にも、二年は過ぎて、都喜子は両親の勧めに依り、程遠からぬ三村より、今の夫——清吉を迎へた。

雪子は七歳の學齡に達したので、お美代と共に石岡小學校へ通ふ身となつた。

お美代は都喜子の末の妹であつて、雪子には叔母に當るが、僅か一歳違ひの事として、二人は、

「お雪！」

「お美代ちゃん！」

と、愛しみ合ひ、眞の姉妹も及ばぬ程の睦さであつた。

定一も同じ學校へ通ふた。

雪子は雨の朝も、風の日も、学校を休んだ事はなかつた。そうして學び勵みし甲斐は、八ヶ年の後、卒業の際には、品行方正、學術優等生として、郡長より榮ある硯箱を賞賜されたのであつた。

思へば——その頃よりである。

学校の往々復るさに、並ならぬ心づくしを見せた一人の男生があつた。

これぞ！ 雪子の生涯に、喜びと悲しみと、怨みと、涙とを以つて、一篇の哀史を綴らしめた富谷恒夫であつた。

お下げ髪の可愛い雪子は、お美代と連れ立つ日は多かつたが、鞆姿の恒夫と通ふ日も少くはなかつた。

「あら——恒夫さん！ 妾、何う仕様か知ら、下駄の鼻緒が断れちやつたの……」

「なに！ 雪ちゃん、下駄の鼻緒が断れちやつたつて？ よし僕がたて、やら

う」

恒夫は直ちに腰の手拭を細く裂いて鼻緒を繕て、やつた。

「恒夫さん！ 有難う……」

雪子は、黒い瞳を美しく瞞つて、感謝の意を表したのであつた。

「あゝら、富谷と雪子ちゃんは可笑しいね……」

口悪ない友達は噓し立てた。

昔から富谷と、石田とは親戚の關係がある處から、互ひに往復は許されて居つたが、

元より純白な子供心！

その底には燃ゆるべき物のある筈はなく、兄弟の如く親しみはすれ、その心は至極單純であつた。

然し、幼くとも、男と、女とである。單純な心は何時まで持續し得るであら

うか。

9 戀瀬の堤

常盤の松の枝が枯れても、戀瀬川の水が絶えても、タイムにだけは底止する處がない。

時は日と過ぎ、月は年と経つて、子供は大人に——中年は老人に——寸は尺に

——尺は丈に——そして桐苗もいつか筆筒に——

定一も、恒夫も、今は最う立派な青年である。

お美代も、雪子も、共に花も羞ふ年頃となつた。

此時、丁度恒夫の友達に、恒夫より三つ年上の、津田徳衛と呼ぶ青年があつた。雪子の美貌に、心密かに思ひを寄せて居つたのである。

徳衛は同町での模範青年と呼ばれて居た。

「徳衛さんは勤勉家だ、

中々感心な青年だ、

今の若い者は彼れに學ぶ所が多い……」

町内では誰一人として、彼を褒めぬ者はなかつた。

然し戀は怪者であつた。

彼れとても戀のためには凡夫であつた。

一度び雪子の姿を心に描いてから、胸の思ひのやる方なく、一日、恒夫に心の鍵を渡した。

時は陰曆の十五日——農家では神事と稱して休日である。

二人は仕立卸しの紺飛白に兵兒帯を締め、烏打帽を被り、徳衛だけは銀縁の眼鏡をかけて、共にステッキを振りつつ、戀瀬川縁へと散歩に連れ立つた。

菜の花の匂ふ道を縫ふて、郊外に出ると、際限もなく晴れ渡つた紺碧の空には雲雀が囀つて居た。

湖の様に展げた田圃には、遠く筑波、加波、葦穂の連山脈が、ぼかされた霞の幕に淡い背景を劃して——宛然、繪の様——

広い地上には、春の日が充滿に降り注いで、樹も、草も、水も、塊も、皆青春の血潮に燃え立つて居る様に、華かな色調に輝いて居た。

二人は漫ろ歩いた足を、青々と生えた土堤の若草の上に屈めて、恍惚として眺めた。

この自然の美しい光りの中に自分までが溶け込んで了ふかと思はれる程——長閑である。

「全くいゝ景色だな——」

恒夫は思はず感嘆の言葉を發した。

「ウム……………」

徳衛は張り合ひのない返事をして、唯肯くだけであつたが、突然に、

「恒夫君！」

「何！ 君？」

「……………」

「何だい！ 君？」

恒夫は重ねて聞き返した。

「…………… 僕はね！ 君……………」

徳衛は、こゝ迄云ふと、急に咽喉の底に熱いものゝ固まりが迫つて来た様に、言葉が塞まつて了つた。暫くして、

「君！ 笑つちやいけないせ——僕はあの……………雪ちゃんを……………思つて居るのだ……………」

徳衛は最後の言葉を思ひ切つて、云ひ放つたが、上氣して耳が赫りば、つと曇つた眼鏡を袖で拭きながら、羞しげに下を向いた。

恒夫は驚いた様に、

「君！ 本當か？ それは………」と、凝と徳衛を噴めた。

折しも、川の面を棹さして来る小舟から唄聲が漏れた。

細いけれども

戀瀬の川は

つきぬ流れが

頼もしや……………

或は高く、低く、細く、長く、徳衛は凝と耳を傾けて聞えた。

戀瀬川でも

早にや瘦せる

瘦せりや

河原の片流れ……………

舟はいつの間にか川下へ消えて行つた。

10 せゝらぎ

恒夫の驚きは尤もであつた。

青年の艶と仰がる、徳衛に、かゝる戀などの経緯があらうとは思はなかつた。

徳衛は尙語を續けた。

「恒夫君！

僕がこんな事を云ふと、君は屹度、淫な奴だなんて蔑むだらうが……………僕  
は決してそんな考へから出たんぢやない……………」

眞實！……………」

と最後の言葉に力をこめて又云はふとしたが、急に口を噤んでしまった。

恒夫は、無言の儘聞いて居つた。

川のせゝらぎは清い韻を傳へて静かに流れてゆく。銀色をした礎に、太陽がキラと反射したので、徳衛は眩しさに眼鏡の顔を背けた。

「徳衛君！」

恒夫は重苦しい口調で云つた。

「エ、」

指の先で若草を撈つては川へ投げ入れなどして居た徳衛は、言葉と同時に恒夫を見遣つた。

「今の事、まさか嘘じやないだらうね！」

「何嘘なものか……………戯談にも、我が身の耻は云ひたくない……………」

それに就て、僕は、君に頼みがあるのだ……………本當に……………聞いて呉れ、ばいがナア……………」

末の一句を低く、殆ど、獨言の様に云つた。

「頼みて何に？ 徳衛君」

恒夫は急に聞き直した。

「外ではないが……………」

君は四時中、雪ちやんの處へ行つてるだらう！ それに就いて、僕は、折入つて頼みがあるんだ……………」

耻を云ふが……………僕の心を傳へては呉れまいか……………」

「僕に？」

恒夫はさも困つたらしかつた。

「頼む、頼む、恒夫君！」



僕が一生の願だ、それも君から言つて呉れと云ふのではない、僕が手紙を書くからそれを只渡して呉れ、ばい、のだ』

徳衛は、これだけを云つて、流石に氣耻かしくなつた。

戀！ 戀！

實の處、今迄の徳衛には口にすらしした事がなかつたのである。

恒夫は暫く考へて居たが、

「ウム、よろしい。手紙なら届けてやらう……」

恒夫は、辛じて云つた。此の場合、これより外に言葉は無かつたのである。

「エツ！ 届けて呉れるね——難有う……」

徳衛は急に晴れやかな顔になつて

「恒夫君！

僕は、君が、親切にそう云つて呉れたので、實に、苦しみの底から逃れる事

が出来た。再び、逃れまいと思つて居た煩みの底から救はれて、あゝ！ 心も、頭も、清々した。

今日まで——君に心を打ち明ける迄——僕は、何れ程、心を悩まして居たか知

れぬ』

徳衛は、期様云ひながら、恒夫の手を堅く握つた。

向ふの岸、此方の杭へと棹さしつゝ、筏が二つ唄ひ乍ら川を下つてゆく。

春の日は、長閑に長く、暮れそうにもない。

二人は、水門の柱に寄りかゝりつゝ、また何事かを話しつゝあつた。

## 11 士民の子

矛盾と變化は世の中の常である——。

定一は農に生れて、農を厭ふた。

そして華かな都會生活を夢みた。

筋肉労働よりも精神労働を望んだのである。

彼れにとつて、斯うした新らしき理想は、舊弊な、質實な、父の思想とは大分

懸隔を生じた。

甚だしきは衝突する場合も少くはなかつた。

「百姓は土民だ」

地を生活に弄ぶものは、虫けらの爲すべきことだ。

蟻を見よ！ 土龍を見よ！

土民よ！ 汝等の爲せることは、虫けらの爲せる業ではないか？

假初にも人間と生れた甲斐には………」

定一は、こんな事を口走る日は度々であつた。

「こら！ 定一！ 何を莫迦を云ふ？」

貴様は、米一粒の尊い價を知らんのだな！ 農は國の大本と云ふ事をも知ら

んのだな！ 俚語の諺にも

(子爵伯爵男爵よりも

國を富ますは肥柄杓)

と、農民が無くては今の日本は滅亡ぢや、この大切な農業を、やれ虫けらの、

何のと吐かしやがつて、それで第一、田畑を照らして下さる太陽様に濟むと

思ふか、この罰當り奴が………呆れて物が云へぬわ………これ！ 定一！

貴様は毎日何を食べて生きて居るか？」

「米です——米です——土民の作つた米です」

定一は平然として答へた。

龍一も今は、もう、二の句が吐けなかつたので、

「よし、よし、最早——貴様には何も云ふまい、それ程貴様は百姓が厭なら……よし！ 俺にも考へがある。」

貴様は、貴様として何にでもなつて、人間らしい屁をたれて見ろ……」

龍一は半ば怒り、半ば賤し、半ば捨てばつけの様に云つた。

定一も、今は自分の云ひ過ぎたことを悟つて口を噤んで了つた。

定一は、それより上京して、或る會社員にならんとしたが、父は許さなかつた。

その餘憤は、土地の或る會社に勤める身となつた。

元より鋤鋤持つのを厭ふての事、たとひ收獲は少くとも、筆を持つ事を願ふたのである。

月給は少くとも、家で食ひ通ひの事、懐ろに不足はなかつた。それに多少の小遣は家からも出た。

心、内に豊かなれば、欲望の虜となるのは人の常である。

此の頃の定一は茶屋酒の味を覺えた。

石岡の裏町に巴屋と云ふ料理店に、一寸濊皮の剥けたおつやと云ふ女が居た。

定一は、その許へ足繁く通ふたのであつた。

話は例に依り例の如く進んで落籍となつた。

定一は、數百金を投じて手活の花となしたのである。

これを聞いて、龍一は非常に怒つた。

「何處まで親不孝の奴だか解らぬ、もう！ もう！ 一歩も、家へ足踏みはさせではならんぞ……」

定一は遂に勤當同様の身とはなつた。

「あなた！ 定一とても一時の氣迷ひですから、そんなに手厳しくしなくても宜いでせうね……」

本當に彼さへ、皆の云ふことを肯いてさ、雪子と夫婦になつて、家に居て呉れ、ば、こんな好い事はなかつたのに……」  
母は、さめくと嘆くのであつた。

12 辻 占 ひ

定一の此度の所爲は雪子を嫌つてゝあるか？ 親の意に従はず、賤しい家業の女と夫婦になつたのは、そも如何なる心があつてゝあらうか？ それとも、一時の迷ひの爲めであつたか。  
定一の心ならでは知るよしもないが、人皆は運命の兒であるとするれば、否、彼れ自身とても分らぬのであらう。  
一波立つて、萬波起り、平和の夢は破れた。

定一と雪子の許嫁に就いては、兩家共に一層親密となるべく、亡き佛の爲めと思ひ、双方の親も許し、雪子も斯くあるべく堅く信じて居たのであつた。  
然し、定一は、斯かる事に就いては、極めて單純なものであつた。  
當時、お美代は守木町今井方へ、雪子は同じく八代方へ、女藝や裁縫の稽古に通つて居た。  
時は葉柳茂る夏のある日——  
雪子とお美代は、裁縫の戻り道を、夕日の投げかゝる肩先に、深張りの洋傘を傾けて、例の如く、北向き觀音様の前に通りかゝると、石段の傍らの日蔭に、冠を被つた辻易者が、看板に大きく書いた手の相を鞭さしつゝ、往き交ふ人を呼び込んで居た。  
二人はふと、歩みを緩めて、その前に立ち止まつた。  
雪子は、此頃疎遠がちの定一の事を案じて居ないでもなかつたが、何氣なく好

奇な心で佇んだのであつた。  
二人が近付くと、易者はよい鳥御座んなれと、早くも雪子を筮竹の先で招いた。

「さア！ 待人、縁談、失物、身の上吉凶判断、其外人相、手相、お好み次第………時に——娘さん！ 娘さんには今災難の相が見えますぞ！……一寸見て上げますから、手をお出しなさい………」

二人は、ふと顔を見合したが、雪子は氣になるので、羞かし氣もなく、云はるる儘に左手を出して見せた。

易者は枯木の如く骨ばつた手に、線の軟かな雪子の手先を持つて、掌の上に天眼鏡を當て、暫く見て居たが、やがて燻つた鬚を撫で下しつゝ、勿體振つた咳拂ひをして云つた。

「………さて、縁談の事で申しますと、御氣の毒の相ですが、貴女は第一の

夫に捨てられ、ひよつとすると第二の夫にも見放されます………」

「あら、厭だわ！ 第一の夫、第二の夫なんて、縁喜でもない——嫌なこと」

雪子は、さも不平らしく、若干の錢を置いて、其場を去つた、

「美代ちゃん！ 本當に嫌な占ひね、第一の夫、第二の夫だなんて………」

「そうねえ！」と、お美代は答へたが、噓で、「ホ、ホ」と笑ひ乍ら云つた。

「でも、仕方がないわ………萬更、嘘でもないらしいもの、妾思ひ當る事があるのよ」

「思ひ當る事つて、何に？ お美代ちゃん！」

雪子は急ぎ立て、訊いた。

「第一の夫！ お美代は心の中で思つた。

「そうだ、許嫁だつた定一さん、それは或る意味での、立派な夫、雪子を嫌つたのでないにしても、今の定一さんの行爲は正しく雪子を捨てたもの、第二

の未！ それだけはあるまいけれど……」

お美代は、突嗟に斯様思つたのであつた。

「ほら！ あの定ちやんはね！」

「エッ！ 定ちやんが何うしたと云ふの」

雪子の胸は、烈しく波打つた。

「オヤ！ お前！ 未だ少つとも知らなかつたの」

今度は、お美代の方で驚いた。

「云はうか、云ふまいか、

云へば、きつと嘆くであらう、云はず共、何時か知る時が来よう、が、

一層の事、話して仕舞ふ」と、お美代は決心した。

女の足は遅くとも、道程で云へば二三町！ 二人は何時か家の前へ来て居た。

13 夢 想

家には誰れも居なかつた。

お美代と雪子は上り口の縁の端に腰を下すと、

雪子は云つた。

「お美代ちゃん、定ちやんが、何うしたと云ふの、早く話して下さいな……」

「お雪！ 驚いちや厭よ！」

そりや何時か分明る時が来るのだけれど……妾、最う、とうに、お前、知

つて居る事と思つて居たの……

お雪！ 定ちやんはね……あの茶屋女を嫁に貰つちやつたのですつて……

「……………」

「エツ！ そりや嘘！ 定ちやんはね！ 妾の……」

「お雪！ そりや知つて居ますがね！ それだから妾、お前が未だ知つて居ないと悟つた時、何う仕様かと思つたの、……然し、考へて見れば、親の許した仲だが、未だ何様の斯様のと云ふ譯ではなし、そんな話が無かつたと思へばそれで宜いじやないの……定ちやんは……あの巴屋のおつやとか云ふ女をですつて……」

「それじや、矢張り本當なの、妾、何う仕様か知ら……」

「あ、妾お美代ちやんには近くお嫁にはゆかれるし、定ちやんには捨てられてしまふし妾……妾……本當に何うしたらいでせうね……」

雪子は、今更獨りぼつちになつた様な悲しさに、お美代の胸に顔を當て、泣き初めた。

「お雪！ お前の泣くのは最もだけれどね、斷念めてお仕舞よ！

斯様云ふと、何だか、冷めたい様に聞ゆるけど、決してそうぢやないの！

世の中の事つて皆んな斯様なよ！ これと云ふのも定ちやんが悪い譯でもなく、何ちらかと云へば……許嫁にした親の罪よ……」

「いゝえ、そうぢやないわよ」

泣き腫らした臉を瞞つて雪子は云つた。泣いて、心が幾許か和んだと見える。

「それは、お美代ちやんの考違ひよ、矢つ張り定ちやんが悪いんだわ！

いゝわよ！ 私し、一生獨身で暮すから……」

「あら！ そんな事云ふものぢやなのわ」

實の處、雪子の心になり得ぬお美代は、その慰めの言葉を知らなかつた。

「お、そう、妾、遅くなつちまつたわ！」

お美代は急ぎ、襟を掛けて、夕炊の仕度に取りかゝつた。

雪子は茫然と、庭縁の柱に靠れて、夢ともなく、現ともなく、淡い、迷想到に耽つた。

——彼れは、浮薄なこの世がしみじみ厭になつてしまつた。敢て繼しいと云ふ譯もないが生さぬ仲の父が、あまりに冷たく思はれた。

——今は佛、あの亡き父が戀しくなつた。

雪子は譯もなく昔の事を考へ初めた。

思へば五歳の時、定一さんとお墓ごつこをやつた事もあつた。

——何日の日であつたか？ お美代ちゃんお蔵の中へ入つた時、戦地よりの父の手紙と妾の寫眞を見て、眼を病みはせぬかと心配なされた件が書いてあつた。

「ア、お父さんは、妾のことを、それ程までに可愛がつて下すつたのかしら……」

果ては、お美代と泣いた事もあつた、母の話に出征の際、妾を軍服の手に抱いて、心ゆくまでの頬すりをして呉れたとか、斯う思ふと、矢も楯もたまらず亡き父が戀しくてならなかつた。「そうだ！ これからお父さんの御墓へでも御参りして來やう！」雪子は、ふと迷想の夢より醒めた。

### 14 父の聲

眞實、彼れは迷想より覺めたのであらうか？ きつと、眼を睜いたのを見れば覺めたのかも知れぬ。

又、じつと眼を閉ぢたのを見れば覺めぬのかも知れぬ。

覺めたのか、覺めぬのか、それは雪子自身すらも知らぬのだ。



雪子は急に父の墓参を思ひ立つた。

日は全く暮れて、

石岡の町々には華かな灯が燈つて居た。酒倉の屋根には黄金色した春の月が淡く登つて居た。

雪子は派手な銘仙の衣服を着て居た。

漆の如き髪は當世風の廂に結び、色は白く美しく、ほの闇に浮き出でた姿は、清方の畫の抜け出でしが如くであつた。

右の手に常夏の一枝を携へ。

町を出端れると、エメラルドの様な夕星が輝いて見えた。

路は、廣く、直線に、金砂の如く展かれて居た。

雪子の足は地に着かなかつた。

雲を行く心地に、父の墓へと着いた。

畑の中に方三間の垣根が築かれて、その中に熊次の芳魂が葬られてある。

陸軍歩兵〇〇石田熊次之墓

と、石に深く刻まれた、その文字は夜目にもしるく見ゆる——

雪子は二三歩！ 石段を上つて、垣根の扉を開いて中へ入つた。

悪魔の髪かみの如く生おひ茂しつた柳やなぎをも雪子は恐ろしいとも思はなかつた。

「お父さん。」

暫らく御無沙汰をしました、妾、お線香を上げに来よう、来よう、と思つて

居たのですけれど、遂々来られなかつたの——

マア、この頃じゃア、谷向の方で少とも構つて呉れないと見えて、随分、荒

れて居る事——

雪子は、傍の箒を取つて四邊を掃き淨めた、そして、常夏を花筒に手向けた。

そして、

「お父さん」とその聲は肩を裂く様に細かつた。

「妾、この頃、世の中がしみる／＼厭になりました。

お父さん！ 妾は、何の苦しみも、悲しみも知らない、お父さんが、浦山しくつてなりません……」

お父さん、私は、今何う仕様かと思つて来たの……定ちやんがね！ あの

許嫁の定ちやんが妾を捨て、茶屋女と夫婦になつちまつたのですつて……

それにあのお美代ちやんも、近く菖蒲澤へお嫁に行つてしまふの……

妾、何を樂しみに、この世に生きて居やうかしら。

妾、お父さんの傍が戀しくつて……戀しくつて……」

と、雪子は、父の石碑に顔を當て、泣いたのであつた。

「雪子！ 雪子！ 悲觀するな、生きて居れ！！ 樂しみもあろうぞ！」

折しも父の聲が耳を打つ。

それは八日の月を掠めて、杜鵑が啼いたのであつた。  
雪子は、矢張り冥想到耽つて居たのである、覺めたのではなかつた。  
ふと、己に歸つた時、自分は矢張り庭縁の柱に靠れて居たのに氣附いた。  
又しても杜鵑が一聲！  
覺めたかと啼いた。

15 文 使

この日頃より快活なる雪子の日一日と、沈鬱になり増つて行つた。  
衣桁に懸けし着物の如く、力なく庭縁の柱に靠れては、遙かに谷向の空を仰ぎ  
懐しき小櫻村は閑居山の彼方の空を眺めては、幻に、お美代の姿などを畫きな  
どするが常となつた。

今日も今日とて、己が部屋に閉ぢ籠り、ひとり黙想に耽つて居たのであつた。机に立てた兩肘は、掌に頤を支へて、今夢より覺めたらしい細い腫を一輪挿しの紅椿に投げかけた。

と、三十六片の朱唇が、一時にゆらくと揺らめいて、忽ち、お美代の姿と化つてしまつた。雪子は、懐しさの餘り、聲を立て、呼ばんとした時、ふと、庭先に足音がしたので其方を見遣つた。

障子にさつと影がさして、

「雪ちゃん！」

と、入り來たのは恒夫であつた。

「まア……恒夫さん……」

雪子は立ち上つて室へ招び込んだ。

定一が斯くなつて、お美代が嫁いでより、雪子が最も楽しみとして居るのは恒

夫の來訪である。

例へば行き暮れし旅路に、遠く一點の火を望みし時の如く、その都度、嬉れしさに心はときめくのであつた。

それを戀と言へば云へるかも知れぬ。

けれど、麗らかなる陽光に、花を開くべき小草の芽さすは事實であつた。

今日、恒夫の來訪はそも何であらうか？ 云ふ迄もなく徳衛よりの頼みによりてである。

惱みに悶ゆる戀の文使である。

恒夫は未だ戀を知らなかつた。生れて戀の文使などをやつた事もなかつた。經驗のない者には勝手が分らぬ。勝手の分らぬ者は、つまるところが初心なのである。

「雪ちゃん！ 僕の友人からこんな手紙を頼まれて來た」と。云つて渡せば、

何の造作もないに、恒夫は何故か逡巡つて居た。

内懐ろの手紙をもぢくさせながら、漸く口を開らいた。言葉が重い。

「雪ちゃん！」

今日、僕が来たのは外でもないのですが、

貴女に、少し頼みがあつて来たのです……」

「オヤ！ 妾に、頼みがあつてとすつて、一體何でしょう……」

「恒夫さん！」

妾、貴方の事なら、何んでも聞いて上げるわ！」

雪子の言葉は軽く舌を這つて出た。そして美しい瞳を投げ掛けた。

恒夫は男ながらもつと頬に朱をさした。又耳が火照つて見えた。

「……頼みつて、僕の事じやないが……」

雪ちゃんが承知して呉れりやよし、そうでないと、僕……飛んだ耻をかく

からな……」

恒夫は、稍俯向き勝ちに、羽織の紐をまさぐりながら云つた。

雪子は暫し、恒夫を腫めて居たが、心にそれと察してか、此度は雪子の方で頬を染めた。

「……僕は、何だか、耻かしくて云ひ惜いな……ア、そうだ、雪ちゃん

ん！ 此の手紙を見れば分ります、中に書いてありますから……」

と、一通の封袋を雪子に渡して駆け出した。

「恒夫さん……」

雪子が呼んだ時には、もう、下駄を履いて居た。

バタ／＼と駆け出して裏木戸の方へ廻つた。足音の止んだのは、垣根の破れ目からでも覗いて居るのであらうか。

雪子は、恰も氣抜けした様に、其方を瞞めて居たのであつた。

## 16 畑 打

正月と云ふ骨休みも過ぎて、繁農の時機も近付いて来た。

畑打ちもせねばならぬ。麥作も切らねばならぬ。

もう今日からは總身に力を罩めて、鋤を振はねばならぬ。この腕と、來ん秋の收穫を競はねばならぬ。此れからが百姓の關ヶ原だ、油斷も隙もあつたものではない。

徳衛は斯様思ひながら早朝より鋤を擔いで家を出た。泥にこそ染みれて居れ紺の仕事衣を着て、同じく紺の股引の裾を藁で結び、素足で柔かき土を踏みゆく心地は百姓ならでは味ひ得ぬ。

無作法ではあれ、手拭を鉢巻して、力一ぱい、肺一ぱい、新鮮なる空気を呼吸

する時、自から頭腦の明晰を覚える、又、百年も二百年迄も長命が出来る様に感ぜられる。斯う思ふ、徳衛は鋤を肩にすることに、百姓と生れしことを天に祖先に感謝するのであつた。

「右高濱街道、左作場道」と書いた貝地青年會の指導標を左に行けば徳衛が家の畑地である。

徳衛は畑に入るなり一鋤を入れた。總身の力を腕に入れて鋤を前に引けば土は自づと拓かれて足元に列を爲す。徳衛は横へ横へ、と鋤を入れて進む。背中から、額から汗が流れる。生温い風が快よく顔を撫せてゆく。

徳衛は懸命に鋤を振つた。

ピーーと、上り列車が地を動かして通ると、

「もう正午か、どうれ飯にし様！」

と徳衛は鋤の手を止めて、鉢巻を外して額の汗を拭いて路傍の芝生に腰を下ろ

した。そして、今耕した畑を打ち見て微笑みつゝ握飯を喰べて居た。

七〇

「ヤア、徳衛さん！」

「先日は失禮しました」

「否、僕こそ、飛んだ無禮を」と、同じく芝生の上へ腰を進めた。

「恒夫君！ あの手紙！ 何うでした」

「あれですか急ぐ、雪ちゃんの家へ行つて届けて来ました……が、僕、何んだか氣まりが悪くて、只、手紙を渡したまゝ逃げて来ちやつたんです」

恒夫はこれ丈けを云つて口を噤んだ。彼とてこれ以上言ひ得ぬからである。

「恒夫君！」

そうしたら雪ちゃんは、何んて云つて居ました。その手紙を急ぐ見ましたか？」

徳衛は短兵急に聞き糺した。

「徳衛様！ 今、話した通り、僕は氣まりが悪くてね、手紙を渡しつ放しで駈けて来てしまつたのです……けれどネ、確に渡した手紙だもの見たに違ひはなからうと思ふね」

「然し、恒夫君！ 僕も見たらうとは思つて居るが、何うだろう……直ぐ何とか返事を呉れるか知ら……」

「さア！」と、恒夫は首を傾げた。そして、やがて、

「徳衛さん！ 僕は此れから、もう一枚程畑打をしなければならぬから、失禮します。」

雪ちゃんの事は、此度行つたら何とか聞いて来て上げます」と、立ち上つた。

「……是非、頼むよ」と云つたが、徳衛には最前の元氣はなかつた。

そこを立ち乍らも何か物思ひに沈んで居た。

「恒夫君は本當に届けて呉れたのか知ら！」

と、又それからそれへと思ひを廻らすのであつた。

「あゝ、最う、今日は仕事をするのも厭になつちまつた。

徳衛は鍬に杖突いた儘、呆乎とイんで居たのであつた。

### 17 呪の暗示

「本當に、恒夫さんも可笑しな人ねえ！」

雪子は斯様云ひながら封袋の文字を讀めた。宛名は正しく「石田雪子」であつた。が、

差出人は、「T、T、生」と書してあつた。

「T、T、生」それは津田徳衛の羅馬字の頭字であつたが、雪子は、富谷恒夫の頭字と速断してしまつたのである。

「T、T、生」文字は僅か三字ではあるが、これぞ！ 運命の魔神が、その手中に彼等三名を翻弄すべき呪ひの暗示であつた。

徳衛の考が至らぬ譯でもなく、雪子の推断が誤つた譯でもなかつた。

見よ！ 徳衛が、心に思ふ綾糸の、そのむすばれを丈なす巻紙に移して、雪子の心を唆るべく、胸の弓弦を離れしその征矢は斯様であつた。

戀しき雪子様よ

想ひは遂に堪へかねて、其の萬分の一を書き連ねました。

互ひに逢ふて、相語り得ぬのは何の爲であろう。浮世は兩人の相逢ふを許さぬのであろうか。

私は——この思ひを——云ふ事も、聞く事も出来ぬ爲め、胸中は亂麻の如

く蟠まつて居る——(中略)

あゝ。思ふまい。思ふまいと。自ら心を制して見るが、寸時も念頭より去り得ないのである。

親愛なる貴女様よ!

私の、心の中に潜める。思ひを御斟酌願ひたい……………——(下略)

雪子は讀み終るや、その筆莖の柔かき言葉が吸取紙のインクの様に、胸に泌みて紅潮の奔流を覺え影の様な幻を追ふては暫し恍惚と我を忘るゝのであつた。

「あら妾、何うしたと云ふんだらう……………」

自分で自分の心が解らなかつたのである。

かの冷たき石と石すらも相觸るゝ時は火を發するものである、謂んやうら若き青春の心をや、木石ならぬ雪子の、今は、流石に心動いた。

恒夫が百の辨解も雪子には遂に通ぜなかつた。徳衛ではない恒夫であると、雪

子は彼にのみ思ひを寄せた。

斯くして、それから、兄妹の親みは一步を進めて二人は到達すべき當然な境地に到達した。

「處世と勤學」と題する書中より妻の撰擇、夫の撰擇、其の心得べき箇條數十を抜萃して雪子に送つたのは其の後であつた。

「僕はお雪さんより外に妻となすべき女はないのだ」

「貴方! が、左程までに思つて下さるなら……………。妾は……………妾は……………」

と、ある日の逢瀬に、雪子は、恒夫の腕に取り絶つて、千年も、萬年もと、堅く契を置めたのであつた。

あゝ、計らずも、雪子と恒夫の戀は成つて、徳衛の戀は破れた。

徳衛が羞恥の情を凌んで、眞心を罩めて、雪子に求めた胸の火は、あらぬ恒夫の方に點せられた。然かも、兩人には強烈にして華やかなる火が燈されたので



あつた。

戀は盲目の、闇夜に似ると、人の云へば、雪子の誤點も、又詮のない事であらう。

然し、斯くと知つた時、徳衛の悲歎、憤怒の情は如何ばかりであつたらうか。忘れてはならぬ、鷹の、鷺の、食足りて得意なる時、その影に、犠牲の小鳥の骸ある事を……。

18 憤 怒

「津田さん！ 歸宅が大分早いね」

ふと後より、徳衛に言葉を掛けたのは、同僚でも蓄音機の渾名ある辯造であつた。

辯造は女の様に言葉が多かつた。甲より聞いた事は直に丙に傳へ、丙に語り、すべこべする處から斯く命名られたのである。半分は懸値があるとしても、三面記事の話はよく知つて居つた。見聞も又非常に早かつた。

「誰れかと思つたら辯造さんか、君も、又早いじゃないか」

「ウン、午前中に一仕事しつちまつたので、それで最早歸りだ」

「左様か、僕も一仕事するはしたが、何だか體の工合が悪くなつたので、切り上げての歸りさ」

二人は鍬を擔いで家路へと足を急いだ。

それは、畑打に恒夫と逢つて幾日か後であつた。

「處で、津田さん！ 耳よりの話がありますせ」  
辯造はそろ／＼十八番を顯はして來た。

「耳よりの話？ そりや結構だね！ 百姓だから天理農法の二倍収穫でもあるかね！」

「イヤ、そんなんじゃない……あの富谷恒夫君ね！ あれが大分此頃發展しだしたのだ」

「恒夫君が……發展？ そりや面白いね、朝鮮かな、南滿かな、それとも新領土の南洋かね」

「南洋も南洋！ 石田の新領土へ發展したのだ」

「石田」と聞いて、徳衛の胸は波打つたが、それでも平氣を装うた。  
「辯造君！ 富谷と石田の間は親籍の間柄ではないか、敢て往復したとても發展とは云はれまい……それとも、何か確たる證據があるかね」

「それだから津田の堅造さんなんかには話が出来ぬのだ、あるとも、あるとも、確たる證據があるのだ……」

津田さん！ 蝶や蜂は何の目的を以て、花の蕊に寄るかね！ 富谷が雪子の家に通ふも其處にある所以だ……」

「と、それ丈を以て確たる證據を爲すかね、ハツハ……」  
君は矢張り空論家だね……」

「いや、いや、本論はこれからだよ！  
津田さん！ 貴方は、彼れが、雪子に附文した事を知つて居るかね……」

「附文！ いや、僕は知らんよ……」  
と言ひ放つたが、徳衛は驚いたのであつた。

「附文！」それは自分の事ではあるまいかと、内心穏かならなかつたのである。

鼓動が烈しく波打たすは、附文に對しての驚異であるか、富谷に對しての憤怒の情であろうか？

「君、そんなに驚き給ふな、

雪子とて、かねて心密かに思つて居たこと、……これから先は津田さんの御推察に委すさ……ハツハア……左様なら……」

と、辯造は左へ己が家路へ別れた。

徳衛は、往く／＼富谷のことを思つた。

晝休みに恒夫と逢つた時の、彼れの態度、言葉使などを考へて見て、何時もの彼でなかつた事を知つた時、憤怒の情がむら／＼と胸をこみ上げて來た。熱い涙が頬を傳つて出た。雪子の姿が浮ぶ。

「ウヌ、恒夫の奴、彼れは友誼を無視してキツト遣つたに違ひない、怖るべき

奴だ……蓄生ッ！ 今に何うするか見て居れ！」

徳衛は斯様言つて、確と鐵の柄を握つた。

19 故郷よ

富谷に對して憤怒の情に燃えた徳衛は、同時に深き惱みの底に陥つた。

實際、彼れの今の心を現はすに、如何なる形容を以てし、如何なる言葉を以てしても、その憤怒の情と、失戀の思は云ひ現はせぬのだ。

憤怒！ 失戀！ 實にこの前には何者も焼き盡したであらう！ 或は富谷の一

命をも危まれたかも知れぬ。又は、徳衛は一命をも擲つたかも知れぬ。

が、然し、彼れとてもそれ程の無分別ではなかつた。一度は、戀に迷ふて、盲目とはなれ、彼れには、この大いなる惱みに對して打ち勝つ程の理性の力があつた。思慮があつた。

徳衛は戀に對しては凡人でなかつた。

彼れは程經て、迷ひの夢より覺めた。

「あゝ、怖ろしい夢であつた。まア覺めて宜かつた。

他の花園の花を望むで、俺は今怖ろしい罪を犯さねばならなかつた。

恒夫を怨んだのは、直度、僕が悪かつた。彼れをして斯くあらしめたのも、

思へば天の業であらう！

斯くして「雪子」を忘れしめ様としたのも天の啓示であつたかも知れぬ。

あゝ思へば我れは幸運兒であつた！

と、徳衛は、却つて失戀を喜んだのである。徳衛は程經て、石岡新聞文藝欄に

小詩二篇を投じて、飄然として石岡の地を去つたのであつた。

見よ！ 左に採録せるは彼れが悲しき心の音律である。

「戀の美酒」

若人の誰れも欲つする戀の美酒

そは、美はしきカップに盛られ、  
緋牡丹のごとき色を湛え、  
得ならぬ芳香をぞ、放つなれ。

この美酒の色に迷ひ、香にあこがれ、

世の若人の、皆人の、

喜び、笑み、樂しみ、謠ひ、

はた、惱み歎き、悲しむなれ。

若人よ！ 世の皆人よ！

この美酒こそ、

われ等の神經を酔はしめ、

はた、血を肉を腐らすなれ。

若人よ！ 世の皆人よ！

いかに、その色の艶かに、香の薫しくも、

清き心をぞ、腐らする、

怖ろしき、魔の毒酒と知れ。

「さらば故郷よ！」

戀瀬川の流れよ！

梅にかりし花よ！ 草よ！

わが心にのみの戀人よ！

はた、くさぐさの友よ！

路傍の石よ！ 塊よ！

汝が温き懷ろに生れ、

その濕ほひに浸りつゝ、

若人となりしわれは、

つと、悲しき思ひに襲はれて

やる瀬なき心と共に、

今、故郷を去ぬなれ。

さらば、故郷よ！

わが淋しき姿の汝より失せて、

はふり落つる涙の、よし消ゆるとも、

わが胸に彫られし悲しみは永劫に癒ゆるなり、  
さらば、故郷よ！

悲しき、まゝにわれは去ぬなれ。

徳衛の眞の胸中を知らぬ故郷人は、たゞその詩才を推賞するのみであつた。

あゝ、徳衛は去つた。懐かしい故郷を去つた、健實なる思想と、勞力とを以て奮闘すべく、東京へと去つたのであつた。

## 20 心の鏡

雪子は恒夫と誓を立て、より、その日その日の感想、又は出来事などを雑記帳へ記し初めた。そしてその巻頭に、

『くもりなき鏡にうつる誠意を

あはれと見なば嬉しかるらむ』

の歌を題して、

『これは妾が心に感じた丈を書いたのですから心の鏡と名づけました。妾は嬉れしくも悲しくも貴方によるのみなのです。これを一讀下されば妾の心がおよそ御わかりになります』

と附記し、時折、恒夫に示したのである。

心の鏡！ 實に、二人の交情を知らんと欲せば、先づこれに依らねばならぬのである、左に抜萃せるの一句は、實に、わが千萬言よりも眞實なるものである。

(大正元年十一月某日)

雨降り故縫物をして居ると繩紉に御出なされし故、妾も晝から共になつて居る處へ御すい様が來て二人並んで居る處を御雛様の様だと笑はれた。

(十一月某日)

三日間一緒に寝さくをしたので少なからず注目された。新池の所に仕事に行つて誰も居ないと思つたら、福田の新郎新婦が来て貴女も近頃は外交家になつたなんてまあ面白いふんだと思つた。

(十二月某日)

雪がチラ／＼降り出して寒い日であつたが、背負籠を持つて来て下さつたので山かきに行きしが、初めなので皆に捨てゆかれたが、彼の人のみは手傳つて下さつて一緒に連れて来て下さつた時はしみ／＼嬉しかった。

(十二月十二日)

歸る途中で大變に妾を見る人があるので、後で聞いて見ると農場の兄様が見に来たのだとの事油断がならぬと思つた。

これはその初めを拔萃したものである。

二人並んで雛様の様だと云はれた時、山狩に行つて手傳つて貰つた時、互ひの心は如何に嬉しかったであろうか。外交家と云はれた時は乙女心に思はず顔を赫らめた事であろうぞ。

(大正二年四月一日)

機に倦きて雨後の庭面をうつとりと眺めて居ると裏道を通られしが間もなく御出なされて種々話の末に互の胸の中を打ち明けて末の松山波越さじと堅き誓ひを結びたり、今迄胸にこもれる事ごとが晴れて嬉れしき春の空末廣かれと扇を送る。

(同 五月五日)

十時頃から蠶拾ひを共にせしが、他の人が數多来て居たのできまりが悪かつたが夜も桑扱きをしながら落花帖の話がせられた今日は節句で休まぬでも少しも不平ではなかつた。

(七月七日)

七日の手紙の事に付いて色々に妾を疑り給ふ故、事實を申し上げ御詫したれど御疑ひが晴れぬ故何としたらよからうと別れて床に就いてからも悶へに悶へた。

あゝ切なる胸の中よ!

おゝその疑ひとは何であろうか。

恒夫は雪子に對して何を要求したのだろうか? 見よ! 左の書翰を…………。

『日々に業の辛さは忘すれども』

忘れかねたる思ふ戀人

私とても一分一秒の間とて忘れないのはあなた様の御事です(中略)…………對話中あなたを二心だと申しましたは私の誤りでした御許し下さい(中略)…………過ぎし日の御話が真心から出たとすれば忌憚なく申し上げます。貴女

は私に對して友と云ふ友は私一人である。私の外に夫は持ちませんと申しましたね。私とても矢張りさうです。廣い世界の中、妻とすべきは貴女一人です、此れだけは斷言して憚りません……………今は互にかくまで自白して來たのだから蔭に純美な夫婦關係を結ぼうではないか」と、その要求なるものは處女として到底應ずべからざるものであつた。

「妾しどうしやうか知ら!」

雪子は今更ながら嘆息の聲を發した。

「妾は今、大切な體……………それなのに……………そんな、そんな事もしや弄ばされるのではないかしら……………」

雪子には斯様思はれたので、

「恒夫さん! 貴方は妾を弄ぶんぢやないんですか……………夫でなけりや何故そんな事を云はれるのです……………」



「何に？ 弄ぶ？ そんな馬鹿な事が……お雪ちゃん！ 男にも節操はあり  
ますよ！」

恒夫は斯様云つて迫つたが、雪子は遂に應じなかつた。そして結婚する迄は共  
に慎むべきを諭したのであつた。

……（前畧）私に於ては名譽財産を棒にしてまでも貴女との關係を貫徹し  
やうと云ふ決心なるに貴女は一身上よりの利害よりして私の要求を恐怖す  
るやうな薄弱なる虚の戀なれば余に於ては斷然たる處置に出づべし。  
と、恒夫の手紙は斯様であつた。

## 21 眞實の愛

否！ それは大海の一波瀾——可愛いから憎いの類に過ぎなかつた。

見よ！ 二人が漕ぐ相愛の舟は益々親密の岸に近づかんとしつゝあるを  
別書は恒夫の徴兵検査を案じて雪子が送つたものである。

何事も偽り多き世の中に

戀の心や誠ならまし

實にや、うつり變りて定め無き浮き世の中に、昔も今も變らぬは戀する者  
の心にこそ戀は人生の花とか、憂き事絶えぬ人の子を慰めはげますは只戀  
あるのみ。

あゝ、樂しき戀よ、この樂しさ味はひ得ずして一生を過ぐるは人間と生れし  
甲斐のあらざるよ、されど、美しき花にも森ある如く、歡樂極りなき戀に  
も又辛き切なさともなるものなるよ。

されば、昔も今も戀らぬは人の情、戀の術なきを詩歌によせて世の人にう  
つたへし人の如何に多きかを？

戀は不思議の力を有するにや、如何なる強き武者も戀の虜となり、終りに  
そ憂たてき怨にこそとなん、書きつるわれにも戀の暗路に迷ひ居るこそ可  
笑しけれ。

情は戀の始めとか、不幸に生れしわが身をば優しき言葉に慰め給ふ嬉しさ  
に、世に頼母しき御方と、君の情けのしみごとくと、片時忘るゝ暇もなく、  
逢ふ度毎の嬉しき楽しさ、終りは結ぶ夫婦仲、最早誰れ憚らぬ我夫とは  
言ひながら、情ないは忍び妻、晴れて夫よと呼ぶさへ叫はず、人目を兼ね  
る他人顔、添ふには難き二人の仲、實にや果敢なき戀なるよ。

それにも増して案じらるゝは、君が此の度の検査、若し免るゝ事もあるな  
らば如何に嬉しき事ならんも、兵役に服する事の止むなきに至らば、暫く  
逢ふ事絶えてすら、戀しう思ひ暮すもの、二年三年懐かしき御姿さへ見る  
を得ず、一人淋しく暮す身の如何に悲しき事ならんを、今思ふさへ腸寸断

らるゝ許りなるよ。

御身はこの先如何なる方針をば取りなさるゝか知らねども、只此儘にある  
時は如何に妾の決心堅くとも御身を待ち迎ふる事難かるべし。

只一つ取る道は、御両親の御承諾を得給へよ、一旦公然たる結婚さへ済み  
なば、氣に召さずに去らるゝとも御身の御歸りを待ち申さん。さすれば人  
の謗りも免かれん。そうく、人のそしりを恐るゝにはあらねども、君居  
まさぬ其後は義理人情の柵となり、終には苦しきはめに陥らん。戀しき君  
と共にならば、如何なる辛苦も厭はねど、我が身一人となりて纖弱き女の身  
に絶え得ざるべし。夫の爲めには生命をも惜まぬは妻の本分とは言ひなが  
らそれは戀を遂げての上のことなるよ。自己よりも愛する人に苦勞かくる  
は誠に辛き極にこそ、幸多かれと願ふこそ戀の情なれば、又戀故なれ  
ば是非もなし。

過ぎつる時の御言葉に、未だ疑ひ解げずと宣まひしが、あの事に就きては  
餘り深く語るを好まねども、疑ひかゝる身の悲しさ、此の疑を晴らすには  
かねてよりの御身の望みを満たすより他に思案はなかるべし。此儀に付き  
ては初めよりくれぐれ御願致せし如く、又取返しのかね事になり、世の  
人の謗りも又如何ばかりぞやそれは私も其の様の事ありては御物堅き御兩  
親様、何條御許しなさるべき、尙々事の六ヶ敷なる道理、此の道理を聞き  
わけて、其の事ばかりは公然たる夫婦と成るそれ迄は任けて御許し下され  
よ、妾が一つの頼みぞや、いざさらば。

雪子より

懐かしき

恒夫様まゐる

雪子は年に似げない分別の女であつた。

22 七月十六日

縦令んば胸の綾糸むすばれて疑は未だ解ずとも、相思ふその心と心とは何の變  
りもなかつた。

否、否、變る處ではなく、二人は日一日と益々親密に今や其極度に達したので  
ある。

見よ！ 心の鏡は永劫にそれを語つて居る。

(七月十日)

金刀比羅様から歸つて着物を脱いで居ると裏道で口笛を吹く故もしやと思ひ  
しがその儘床についた。後で聞いて見るとやはり彼の人ださうな、随分口笛  
を吹いて通るのに胸に浮ぶのは不思議だと思つた。

(同 十三日)

水戸に行く相談をして居る處へ森様が來たので急がしく歸つてしまつた。

翌くる朝、森様は妙に笑つて居た。

森様とは阿美代の義理の弟で、雪子には叔父に當るが一つ年下の爲め森之助と呼捨にして居る。

(同 十六日)

約束の時間に遅れたら大變と急いで來て見ると未だ間があつた。折悪く友に出逢つたがごまかしてしまつた……。それから楽しいやら嬉れしいやら夢の様だつた。

家に歸つてからは一人楽しく空想にふけつて思はずほ、笑んだ。

例へ、一秒一分でも、思ふ人と手に手を取つて旅に出づる、世にこれ程楽しい事が又とあろうか？

恒夫の書信にも見よ！

先日は誠に別世界に遊ぶの如き感じ致され候、而し、唯惜むらくは知人と遇合せん事を恐れし爲め、共に肩を並べて堂々と歩行する事の出來ざること實に遺憾に御座候。

と、實に咲かぬ内こそ花の花なれ。恐怖が伴ふ内こそ、眞の快樂ではあるまいか。

(大正三年七月十六日)

九時半の汽車で神立にて下車し、農場を見てから眞鍋まで歩いた。誰れ憚らず肩を並べて睦まじく語りつゝ歩みしが今尙目に残つて居る。土浦の保立に上り晝飯を食べしが大變にお甘味かつた。初めて食を共にしたので差向ひできまりが悪かつた。郡役所の方を見物して三時半の汽車で歸途についた。何時までも何時までも斯うして二人で居たいと思ふたが夢の間に石岡に着いて

しまつた。未だ早いので近くで、須臾く遊んでから歸つた。別れるのが可厭で仕方がなかつたが是非なく別れた。何だか手の中の玉を取られた様で氣ぬけがしてしまつた。

試みに、雪子に一番樂しかつた日はと問ふたならば、雪子は直に七月十六日と答ふるであらう！

水戸に行き、土浦へ行つた七月十六日は、雪子に取つて最も樂い日であつた。

然し、春の日は永くなかつた。

咲いた花の春はほんの一時であつた。

爛漫たる櫻花の一夜の嵐に哀れを止めんとし、雪子は端なくも悲しい思ひに泣いたのである。

一夜の嵐！　そも何であらうか、男の變心か？　否！　否！　二人の仲には嵐

があらうと雨があらうと離るゝ事の出来ぬ堅い誓約が釘づけられてあるの

である。

然らば何であらうか、意外、意外、事は實に意外であつた。

### 23 仇し女

意外な事それは實に寢耳に水であつて、雪子は自分で自分の耳を疑つた程であつた。

「彼の人に限つて他に關係して居る女があるなんて、そんな、そんな馬鹿な事はありやしないわ」

と、雪子はそれを打ち消さうとした。

然しそれは嘘ではなかつた。

通稱蓄音機の辯造は、又しても、甲より乙、乙より丙へと、噂の喇叭を吹いた。

「恒夫は、中々戀幸の好い奴でな、雪子とは好い仲となり、それ計りではない。此の頃では、あの花子ともひよんな仲合になつて居ると云ふ話だ。易者ではないが、まア第一の妻、第二の妻と云ふ譯合なんだらう……」

噂は、輪に輪を畫いて、丁度池に石を投げた様に八方へ擴がつて遂には雪子の耳にまで入つた。

花子とは雪子の年頃の友達であつて、隣字の娘であつた。

然し、物事に思慮深い雪子は飽まで輕舉に出づる様な事はなかつた。怨みに昂ぶる胸を耐へて恒夫に送つた文意は斯様であつた。

(前略)——其れは外の事にては御座なく御身と花子様との事に付き種々取沙汰致し居り候を知らぬ振して聞く妾の心の中は自分が云はるゝよりも心苦しく候(中略)

妾は此の事に付き決して御止めは致さず候、かく申せば愛情の無き様に聞

え候へ共、妾は貴方様を固く信じ候故、如何なる事を遊ばすとも妾との誓約と愛とに變りはあるまじく深く思ひ居り候(下略)

戀人が仇し女との關係を聞きて怒を顔に現はさず、却つてそれは密會の場所悪しき故、御注意ありたしと云つてある。

そして後に此の花子の事は恒夫が嘘なりとの自白に及んで水泡の如く消えて跡なきに至つたのである。

「お前の心は以前通りか」

と、恒夫に尋ねられ、雪子は忍ぶ身の逢瀬叶はざるに對し、左の様な事を云つた。

「昔、印度に兩親に死別れた娘があり、悲嘆の餘り最早此の世に夫は持たず、一生兩親の後を弔はんと佛に誓を立てしが、圖らずある男と深き戀に陥り其時人より結婚を迫まられ如何はせんと思案の胸を戀人に語りし

に、それでは此の世でなければ宜かんらとて、ある大きな洞穴の中に行き  
 芽出度く結婚式を挙げしといふ事を何ぞや聞き候へしが、御許様によき御  
 思案もあらせられなば御教へ下され度願上參らせ候」  
 現在の二人の身に托して面白き言ひざまならずや。  
 其の頃であつた。雪子は胸の思ひを三十一文字に移して「心の鏡」に斯く記し  
 つけた。

かゝる時君がみ胸に抱かれて

心ゆくまで泣かんとぞ思ふ

懐かしき夢のあと追ふ明方の

枕に響く雨だれの音

わが思ひ花ともならば朝夕に

戀しき君がみ手に觸れずや

「かゝる時……」これ怨みありしに非ず、嬉しさ餘りて切なさも得も言へぬ  
 淋しさを感じたるの時であろう。戀人の胸にすがりて心ゆくまで泣かんと思ふ  
 いぢらしさよ。

「懐かしき夢よ！」故人の歌に

思ひつゝ寝ればや人の見えつらん

夢と知りせば覺めざらましを

42 夢の一卷

書翰に、歌に、見ゆる如く雪子には天分の文才があつた。  
 左に抄録するものは大正三年の夏、端近く、森に傾かんとする二十日の月を眺  
 めて、わが來し方の幻を追ふて華かなる夢の一卷を詩に賦したものである。

嗚呼夢の世や夢の世や

戀しき人を思出に

あまり心の寂しさに

せめて月やを眺めんと

縁の柱に身をもたせ

空を仰げば二十日夜の

月はおぼろに曇りがち

あゝかの月を眺めつゝ

共に楽しく語りしが

今宵は如何におはすらん

思へばいと懐かしく

君ます方を眺むれば

あれ飛び行くよ流星の

あゝ堪えがたき胸の中

思ひ起せば三年の

月日も夢と過ぎつるよ

戀を解せぬ爲めなるか

理想の人のなきためか

たゞ亡き父を慕ひつゝ

見ぬ面影を忍びしが

いつとはなしに彼の君の

相見る毎にしたはしく

胸に騒ぎを覚えしが

乙女心の羞かしく



云ひ倚る術もあら波の

磯の鮑と過ぎにけり

思ひ出づるも楽しきは

櫻ちる日の夕まぐれ

堅く閉せる胸の戸を

愛の鍵をもて開きつゝ

千代も八千代も變らじと

堅き誓ひをなせしより

相見ることを楽しみて

澄みたる月を眺めつゝ

睦み語りし楽しさよ

人目を忍びはゞかりつ

顔に輝く嬉しさを

つゝみかねたる胸の中

轟く心おさへつゝ

互に手に手引かれつゝ

そゝろ歩るきの嬉しさを

誰れはゞからの汽車の旅

楽しき事の數々も

満つれば虧くる空の月

逢へば別るゝ悲しさよ

儘にならぬを啣ちつゝ

一人泣きしは幾そ度

相逢ふ事の重なれば

思ふ心のます鏡

寫る面影消えやらで

たゞ君のみの戀しくて

山より高き父母の

うけし御恩も海よりも

深き情にかへられじ

あゝかの君と共ならば

如何なる苦勞も厭はじと

あゝかの君の爲ならば

などか命も惜しまじや

思ふ誠の通じけん、

地位名望もかへり見ず

堅き誓ひを守らんと

世に頼母しき言の葉よ

霜をば凌ぎ雪に堪え

香り床しき梅の花

我は操の色も濃く

花咲く頃を松竹と

心ひそかに樂めと

月に叢雲、花に風

夜半に嵐の吹き荒み

散りぬる事のありもせば

如何に悲しき事ならん

思ふ折柄笛の音に

我にかへれば冷やかに

秋風いと身に沁みて

誰が吹きすさぶ妙の音か

かすかに遠く聞ゆなり

歌詞全くは調はず、推敲の餘地なきに非ざれども心意言外に溢れて、躍如たるを見るべしである。

25 溪間の巖

岩をもれし清水の、谷に落ち、瀬となり、淵となり、懸ては海に注ぐ如くに、雪子と恒夫はわりなくも谷に落ち合つて『夫婦』の海に注ぐべく、堅くく末を約して、今は花咲く春野を密よりも甘いく戀を叫びやきては流れつゝあるの

である。

然し、満つれば虧くるが浮き世の例——、此處にこの流れを堰かうと謀つたものがあつた。

時は、如月は梅薫ほるその末日。

富田石田兩家の知己に田口慶太郎と呼ぶ者があつた。年の頃は三十八九百姓であるだけ、在郷軍人であるだけ、頑軀、赫顔、恰も鬼の様である。彼は町内でも富裕の富谷家に對して、媒酌の勞を取るべく、腹に一物があつた。

慶太郎は、富谷、石田の兩親を密かに呼んで何事かを語らんとした。

あはれ二人の清き流れは叫びを止めて暫し淀まざるを得なかつたのである。

『清吉様！ 今日貴方をわざ／＼お呼び申したは外の話ではありませんが……

……實は俺の嫡の里に年頃の娘がありまして、それが……この富谷様の息

子に、ほん話が纏まりかゝつて居りますので……。

「は、はア…………それは結構な話で……………」  
清吉は挨拶の仕様もないので斯様言つた。

「それに就いては何ひたい事がありますが……………、あのお雪さんと、恒夫さんの事に就いて、大分世間で言ひ布らして居る様ですが……………本當でせうか……………」

「イヤ…………それは……………」

清吉はこれのみを云つて口を噤んだ。同じく都喜子も俯向いた。

「清吉様……………それが事實でなく、ほんの世間での噂であつて見れば結構ですが……………イヤ貴方のお娘さんの事ですから、そんな事はないに極つて居りますがね……………この……………俺の姪を世話するに就いて、貴方は異存はありますまいね……………それとも……………お雪さんをお世話しませうか知ら……………」  
清吉は鋭利な刃でぐざと刺された様に感じた。

あゝ何と云ふ非禮の言であらう！

流石に清吉は、憤怒の情に胸は張り裂ける心地がした。

雪子と恒夫の事に就いてはかね／＼知らんではなかつた。實の處、都喜子の處にまで恒夫から話もあつた。又雪子とてもその積りで心を決して居るのであつた。が、機未だ來らず今日に至つたのであつた。

(あゝ、世の中に、義理と人情がある以上……………)

而かも、先方の縁談を破談してまでも、己が娘を世話して呉れよとは……………

如何して親として言ひ得やうか……………)

清吉は暫し言葉もなかつたが、儼然として唇を開いた。

「慶太郎様！」

御厚志は有難う御座いますが……………それでは何卒！ 貴方の姪さんを御世話話なすつて下さい……………雪子の事に就きましては、譬へ何の様な事がありま

せうとも、俺は親としての権利を以て、如何様にも始末いたします……何卒……此方には御心置きなく、その姪娘さんを御極めなすつて下さい………然し慶太郎様！ 雪子は萬一甚麼な決心をするか、それ丈はお断りをして置きます」

侮辱を耐へる言葉は一團となつて口を迷り出でた。

實母都喜子は其の傍にあつたが、断乎たる夫の言葉に、如何とも言ひ様がなかつたのである。

清吉は歸宅するや膝下へと雪子を呼び寄せた。

「お雪………」

「ハイ………」

唯事ならぬ呼聲に、雪子は何事ならんとおづ／＼父の前へ進んだ。あはれ鐵弾は落下した。

「お雪………お前と恒夫との事は今日限り断念しろ、………お前も辛かろうが

この父も辛いぞ………」

聲は何時になく曇つて然も底力があつた。

「お父さんそれは………」

雪子は聲限り言はうとしたが、聲脈が一時に寸断された心地してその儘其處へ泣き伏してしまつたのであつた。

あはれ、一輪の紅花は踏滲られた體であつた。

26 義理のしがらみ

思へば一篇の哀史である。  
實に父の言は是であり、又非であつた。

「お父さん！ それではあんまり……」

「何に？ 無理だと云ふのか……何うしても断念められぬのか……」

「ハイ……断念めろと被仰れば断念めぬ事ありませんが……お父さん、この事ばかりは何うぞ許して下さいまし」

「イヤ！ 成らぬ、成らぬ、何うしても許す事は相成らぬ。」

これお雪や、お前が親の言葉に従はれず、尙断念する事が出来なければ、それではよろしい。

父はお前を殺してそうして死ぬぞ！」

清吉は、浮世の義理の柵に、心を鬼にせねばならなかつた。そして意を決せるものゝ如く儼然と言ひ放つて去つた。

雪子は狂氣の如く泣きに泣いたのである。

一時に張り詰めた氣分がゆるんで暫し失つた意識が程経て蘇つた時、雪子は

静かに目を開いた。室内の總ては一變して、皆愁ひを帯びて居た。

畳は涙に濕つて、袖は絞る様であり、臉は鐵の扉の様に重く感じられた。

「お雪！ さぞ、辛かつたらう！」

隣室より静かに入り來た都喜子は雪子を抱き起しながら言つた。同じく泣いたと見ると臉が赤かつた。聲も震えて聞かれた。

「お雪！ お父さんが、斯う仰言つたのも、これには深い譯があるのだよ。」

お前と二人の仲は、この母が承知して居るし、お父さんだつて知らぬ譯ではないのだが、實は今日、田口様に呼ばれて行くと、恒夫さんの縁談に就いて

話が……」

縁談と聞いて雪子の瞳は怪しく光つた。そして母の顔を瞋めた。

「それがね、慶太郎様が自分の姪を世話するのだが、異存はないか、お雪様と恒夫様の關係は本當か、イヤ、清吉さんの娘さんだからそんな事はあるまい

つて……お父さんに………耻！ そう、耻をかゝしたの………」

「エ、ツ！ あの慶太郎様が」  
「あゝ、そうなの、それですから、お前も知つての通り、肯かぬ氣のお父さん  
でせう、娘の事は俺が何うでもするから、その姪娘様を世話して呉れ、と云  
ひ切つてしまつたの………」

「エツ！ お父様が！」  
雪子の胸は又しも怪しく慄いた。そして再び泣き伏した。

「お雪！ そう云ふと、お前はこれのお母さんを怨むか知れないが………私しだ  
つてお前二人を夫婦にしてやりたいさ！ 又、この場合慶太郎様にも云はう  
とは思つて居たが………何しろお父さんがあゝ云つてしまつたでせう！ お  
母さんは何とも云へなくなつちまつたの………」  
お雪！ 何うぞ許してお呉れ！ この母が頼みます。

浮世に義理と人情がなかつたら、又、それを顧みなかつたら、お前二人は  
夫婦になれたでせう。けれどその柵には何うしても勝てぬのが、この世の慣  
ひ、人の道………お雪！ 怨むなら、何うぞ、この世を………この母を怨ん  
でお呉れ………」  
果ては、よゝとのみ雪子の背へ泣き伏したのであつた。  
雪子はその下より微かに聲を立てた。

「お母様」  
「妾、妾、何んで怨みましよう。いゝえ妾が悪かつたのですから………」  
たゞ妾は、慶太郎様を怨みます。親にまで耻を與へ、無理に柵を作つた慶太  
郎様を怨みます。  
御母様！ 妾は、何うして？ 何うして、こんな辛い浮世に生れて來たんで  
せうね！」

「エッ！ お雪！ お前はまたこの母を泣かせる積りなの……」  
血を分けた、親と子は浮世の柵の底に泣き崩れるのであつた。

27 頼みの一人

「あゝ、最う妾として頼みに思ふのはあの恒夫さんばかりだ。」

雪子は斯様思ふと、矢も循もなく恒夫に逢ひたくて堪らなかつた。

恒夫とてもそうであつた。

今は過ぎし日。雪子より

「両親の御許しを得給へよ」との書翰を手にしてより、恒夫は幾度か、その胸中を母に打ち明けて許諾を乞ふたのである。  
然し、恒夫の母は許さなかつた。

「もしも、お前が雪子と一緒に居る様だつたら、この母は家には居ないよ」と迄云つた。  
そして、

「田口様から話のあつた娘さんをお貰ひ、林村での資産家ではあるし、容貌はよし、女としての心得はあるし、その方が何れ程好いか知れやしない！」  
と、附け足した。

又、父の辰之も、

「若い者同志で夫婦約束して一緒に居た奴で、縁なものは一人もありやせん。云はずと知れた、お前等は今迷つて居る。菊石も笑回と見える時だ、もしも親が許して夫婦になつたとする。迷ひの夢の覺めた曉には屹度この親達を怨むに違ひない。」

悪い事は云はぬ。雪子を思ひ切つたは、お前の身のためであり、又親に對し



ての第一の孝である——」  
と、そして尙、言葉を續けた。

「林村の——慶太郎様から世話のあつた娘は申し分のない様にも思ふ。が、然し、これ許りは親達のみで極める譯にも行かぬ。

これ恒夫！ この一月七日が最も日の好いと云ふ話だ。慶太郎様と一寸見合に行つて来ては何うじや……何アに見合したからと云ふて是非貫はねばならぬと云ふ譯ではない、一目見て、厭ならばそれで止むを得ぬ、ただ、眞の己の心に聞いて見ればいゝのだ……」

母の言葉に、父の言に、恒夫の心はいたく亂れたのであつた。

「今、此處で自分の思ひを通すとならば、親への不孝をせねばならぬ。あゝ一度は父の、母の、命令に従はねばならぬのか」  
と考へたが、雪子の事は何うしても思ひ切る事が出来ぬのであつた。

兎角する内、見合の日も近づいた。

恒夫は石田家に雪子の養父、清吉を訪れた。

「叔父さん！ 明日は愈々私の見合の日だそうですが、私は都合上参られませんから叔父さんより、田口様へよろしく断つてください……」

「都合上とは！ 何んですか、行かないと仰言るんですか？ それでは私が困ります」

「だって、叔父さん！ 僕として何うしても行かれません、實は、お雪さんの深い……」

「イヤ、それは聞きました。が、然し、お雪は、實は、三村の方へ嫁く事に極つて居りましたので……」

「エッ！ 三村へ！……」

「何んで、俺が嘘を云ひませう、三村は私の實家へ極りました。それに就いて

お雪には篤と話してありますから、何うぞ此方には構はず、御出でなすつて先方をお取極めなすつて下さい！」

清吉が斯様言つたのも、その真意を究めれば、富谷家に義理を以てした事は云はずとも、明白である。

「だつて、僕、何うしたつて行かれないんです」  
終りの一句に力を入れて確乎たる心を示したのである。

「構ひません、俺の方は決して構ひませんから何うぞ御出でなすつて……」

「だつて、僕は……」

「いや何うぞ……」

「ぢや、行きます、行くには行きますが、何卒、それに就いての後の所は宜しく御願致します」

恒夫は斯様言ひ残して辭し去つた。そして考へた。

「母も、父も、又清吉も、雪子を思ひ止まれ、そして林のを貰へと云ふ、然し僕には何うしてもそれが出来ぬ、どうせ、不孝の罪は免がれぬが！ 取るべき道は一つだ……」  
確と握りめた拳の中には何か決するものがあつた。

### 28 堅き手と手

桔槔が一しきり、ギイと音して、貝地の町は黄昏れ初めた。

軒の端より、木立の間より幾條の炊煙が立ち昇ると、離れた家々には十燭位の電燈か點いて、庭から道へ——道から畑へ——と夜の帷は全く地を掩ふのであつた。

此の暗を踏んで、雪子の家の裏木戸に窺つと黒い人影が忍び音に口笛を吹くと

屋内に無言の合圖があつて、密かに裏木戸が開かれた。

「先刻から待つて居ました」

「済みません……」

二人は紛ふ方なき雪子と恒夫とであつた。

「今夜、これから懸瀬川の方へ行きませんか」

「だつて！ 貴方寒くないの？ 一月ですもの、川は厭ですわ」

「それぢや、明神様の方へでも……」

二人は人通りの少ない裏道を歩きながら語つた。

「恒夫様！ 妾何うしやうかと思ふのよ！」

「イヤ、お雪さん！ 決して心配しなさんな、第三者が何を仕様と、僕の、僕の心は金鐵の如く、決して變りやしないのだから……」

「恒夫さん！ それは本當なの？」

「本當ですとも、誰が戯談を云ひますか」

「……だつてね！ お父さんがね！」

「縦令んば、御親父さんが何を申したか知れませんが、大丈夫です、お雪さん！ 僕の心さへ、又、貴女の心さへ、確乎して居れば、それで宜いぢやありませんか、金城鐵壁！ 如何なる敵が押し寄せて來ようとも、敢て恐るゝに足らんです」

「そりや、そうですけれど……」

「ねえ！ 恒夫さん、どうぞ其の積りで、千年も萬年もね、變らずに居て下さい」

「い」

「大丈夫です、僕として、妻となすべきものは、お雪さんより外にないのですから……」

二人は、いつか町外れの道を出抜けて、總社明神の裏坂を登つて居たのであ

つた。  
 真黒な木立に圍まれた境内は、森として凄い程、夜の沈黙が續いて居た。  
 さく／＼と砂を踏んでゆく二人の下駄の歯音だけが、四邊に響く計り、そよとの風もない。只一つ社頭の電燈が嚴かに闇を睨んで居るのであつた。  
 暗き杉生の弦月に寂を呼ぶは梟の聲であらう。二人は淋しいとも思はず、話しを續けた。

「然し、お雪さん！ 僕は困つてしまつたのです。實は、明日が見合の日なので、今日貴女のお父さんにも逢つたのですが、是非にと云はれて僕は行かなければならんです」  
 「そりや行つたつて宜いぢやありませんか。見合したつて、厭だと云へばそれ迄でせう、貴方が行かないとすると、尙變ですわ。それよりか、行くだけ行つて、そして斷はれば宜いでせう……」

「實は僕もその積りで居るのです、それはまあ、それで宜いとして、お雪さんは三村の方へ嫁くんですつてねえ！……」  
 「えつ！ 妾が……恒夫様！ 戲談でせう！ 貴方と云ふ人があるのに、何んで妾が行かれますか……」  
 「でも！ 今日貴女の御父さんが云ひましたよ！ お雪は三村の實家へ遣るんだつて……僕は嘘だと思つたが訊いて見たのです……それはそうと、明日のことを何うしようか知ら……」  
 二人は暫らく同じ様に黙考へた。  
 燃ゆる胸と胸との波音は、更けゆく夜氣に觸れて、二人の手と手は堅く握られた。

「お雪さん！」  
 「恒夫さん！」

「思ひ切つて家出しようか知ら……」  
聞ゆる二人の聲は相同じかつた。

29 忍ぶ影

巖を劈いて奔騰すべく二人の水勢は弱かつた。

「一度家出すれば、身は勘當——あれだけの財産は容易に得難いからな」  
恒夫は獨り言の様に云つた。

「妾も義理ある仲だからと世間に笑はれるのが厭だわ」  
雪子も云つた。そして思ひ出した様に、

「恒夫さん、見合ひに行つたつて、宜いでせう！ 貴方の心さへ確かりして居れば……」

「そりや大丈夫だけれども……」

「ぢや行つて入らつしやいな、妾、貴方を深く信じて待つて居ますわ……」  
「……ぢや、行くとしよう、然し、お雪さん！」

と後又、何事かを云はうとしたが、折しも誰か歩いて来る下駄の音が聞えたので、二人は慌て、右と左へ——雪子は楠の御神木の許に身を屈め、恒夫は杉の大樹の蔭に身を寄せた。

下駄の音は、一步、一步、近づいて来たが、拜殿の前でハタと止まつた。  
暗い月の光りを透して、雪子が窺と覗いて見ると、それは女の姿であつた。

雪子はもしや母ではないかと思つた。恒夫も又、そうらしくも思つたが、悟られては大變と息を殺して居た。

母らしい人は、お養錢を投げて、合掌し、しばらく何か念じて居たらしかつたが、間もなく元來た道の方へ去つて了つた。

そして下駄の音が全く聞えなくなつた時、二人は身を現はしてすり寄つた。

「お雪さん！ 今のは丁度お母さんによく似た人ですね」

「妾もそう思つて見て居たんですけれど、お母さんか知ら？ もしお母さんでしたら、一體今頃何を信心に來たんでせうね……」

「左様さ、お雪さんのことに就いて來たんだらうよ……何と拜んだか明神様に聞いて見ると一番早分りだ」

「オホ、それよりかお賽錢に聞いて見た方が早いわ……」

「それは戯談として、お、寒くなつた。あまり遅くならぬ内に歸らう」

恒夫は雪子と手を取りながら、表の石段を下り初めた。

谷底の様に見ゆる宮下の青樓には、未だ宵ながら閑寂として人聲もなく、軒燈が二つ眠そうに輝いて居た。

二人は石段を一つ一つ下りながら、

「恒夫さん！ 此處へ誰れか通りかゝつて二人を見たら何と思ふでせう？」

「左様さね、お似合ひだと思ふでせうよ……然し徳衛君に見せたら……」

と、ふと、恒夫は何か考へ込むらしかつた。

「そう——そう！ 徳衛さんと云へば、今、何處に居るでせうね！ 本當にあ

の方には妾濟まなかつたわね……」

「何でも、東京に居ると云ふ話だが……實際！ 徳衛君には……然し、お

雪さん！ 貴女が悪かつたのだ……」

「あら！ 何故です？」

雪子は恒夫を見遣つた。

「と、云ふものゝ、徳衛君に濟む様にすると、僕には濟まない譯合になつて居

るからね……」

恒夫は軽い笑ひを浮べて雪子の顔を覗きながら云つた。

「然し、徳衛君は僕を怨んで居るだらうよ！」

お雪さん！ あれ、彼處に、月に光つて戀瀬川が見えるでせう！ 思ひ起せば、それは幾年かの昔、何んでも堇花さく頃でした。あの土堤の水門の柱に凭れながら、徳衛君の切ない胸の思ひを話されたのは、まだ覚えて居ますよ。

恒夫君！ 僕はお雪さんを思つて居るつてね、最初貴女に上げた手紙は、實はその時徳衛君から頼まれたのでした、お雪さん！ 今になつて、こんな話をするに貴女は變に思ふでせうが實際そうなのでした。あゝ年月は移り變つても、あの水の流れば屹度未だに僕を怨む様に流れて居るでせう……」  
恒夫は暫らく足を止めて、凝然、ほの白う暗に流るゝ戀瀬川の方を眺めた。雪子はその面を深く見守つた。

30 彌生の空

明くれば一月七日——。

今日ぞ、慶太郎が待ち構へた、恒夫の縁談の見合を定めた日である。

木樵は木を選ばずとか、一度振り翳した斧は打ち下ろさなければ止まぬ如く、慶太郎はあらゆる術策をめぐらして、この見合ひを成立させ様と努めた。幸ひ、石田家の方は自分の思ふ壺に入つたし、富谷家の兩親とても、同じく意のままに行つた。只萬一を危ぶまれるものは恒夫の心のみである。

「これで本人さへ説き伏せれば、——それで自分の望みは達する……」

斯様——思つた、慶太郎は早速恒夫に逢つて力説した。  
「恒夫さん！ 今、私が喋々して申し上げる迄ありません。賢明なる貴方様

の事ですから、無論、御存じでも御座いませうが、結婚と云ふ事は人生の一大事ですぞ！

大きな話をする様ですが、彼のナポレオンの皇帝たり得たのは一に妻の力でありまして、又今日の日本にしましても大臣や其他立派な地位を得た方々の例に見ましても皆そうてす。不釣合な配偶者こそ、それこそ百年の不作、否、一生の不幸ですぞ。

苟にも貴方様は、然かもこの町で町會議員と仰がれる富谷様の御子息様ではありませんか、此の事に就いては篤と御考への程御勧め致します」

「ハイ……………」

恒夫は力ない返事をした。

慶太郎は猶語調を強めて、

「恒夫さん！ 私は富谷様と舊くからの知己として、豫々、貴方に良縁を御世

話し様と心掛けて居つたのです。丁度幸ひ、林村に私の姪が有りまして、

……私の口からは少し口幅の様ですが、家の財産と云ひ、本人の容貌と云ひ貴方のお配偶者としては申し分はなからうと思ひます。

恒夫様！ 石田の誰さんの様な、第一家の財産の桁も違ひますし、あんなお多福はとても釣合ひなどになりません……殊に若い内の一時の氣迷ひで貰つた配偶者に満足したものは一人もありません。これは昔から世間の實例が證據立てゝ居ります。決して貴方様に不爲になる様な事は致しません。まづ私にお任せ下さいまし……………」

慶太郎が執拗なる辯舌は遂に恒夫を自家薬籠中のものとなした。

其の翌日、二臺の人力車は恒夫を乗せて掛聲勇ましく、林村宇加良須里なる藤木家へと走つたのである。

——萬事休矣——慶太郎の姪てい子を娶るべく話は意外に迅く成立したのであ



つた。

恒夫が盤石の心は遂に動いて、一朝にして雪子との百年の誓ひを破つてしまつたのである。

やがて、富谷家と藤木家とは黄道吉日が選まれて、結婚の日が決定された。数日の後、恒夫は雪子に逢ふて云つた。

「お雪さん！ 僕は、他から縁談を餘儀なく迫られて、愈々結婚式を挙げなければならぬ事になりました」

「えつ！ 貴方が他の人と結婚を……」

「お雪さん！ 驚くのは尤もですが、實はそれに就いてお話しをして置こうと思つて……」

「恒夫さん！ 貴方は本當に結婚をなさるのですか？」  
雪子は眞剣の體で訊いた。

「え、本當です……が、何もそんなに驚かないでも宜いのです。只一時の餘儀ない事情の爲ですから……」

雪子は急に震ひ聲で、

「恒夫さん！ 貴方は……貴方は……随分ひどい人です！ 恒夫さん！

貴方は先日妾に何とお言ひでした。まさか、お忘れにはならないでせう。ああ！ 妾は、妾は、騙されて居たのでした。……今の今まで貴方を深く信

じて居ましたのに……あゝ！ 妾！……」

「まあ、お雪さん！ 何もそう泣かなくても宜いでせう。今、結婚をしたからつて、僕は決して貴女を捨てやしないのです。これは、ほんの世間に對しての義理——一時親の命に従つたまでの事です。譬ひ彼を嫁つても家へ置くのは少しの間です。すぐ離別して、貴女と必然夫婦になります。

「だつて、そんな眞似が出来ますか……よう御座います。貴方はそう言つて

妾を捨てる積りなのでせう、え、もう解りました」  
 「いや、決してそうぢやない！ 必然！ 夫婦になりますから、少しの間辛抱して居て下さい！」  
 恒夫は拜まんばかりに頼んだ。  
 あわれ、晴るべく見えし彌生の空は、怪しくも曇つて、惨ましや、花に雨となつたのである。

### 31 恒夫の結婚

人の泣いて哀しむ時、その第一の同情者は涙であり、又袖である。  
 この二者は如何なる場合と雖も、泣く時、嘆ぐ時は、必ず、眼のあたり、頬のあたりを見舞ふては好く慰めて呉れる。

今の雪子の境遇がそれであつた。

慶太郎を思ひ、恒夫を思ふ時、その無二の同情者たる涙は心の真底より暖き上げて来て瀧の如く腫より撫づれば、袖は柔かに頬の邊りへ来てその冷たい物語に、夜一夜、日一日、泣き浸るのであつた。

あわれ雪子は又泣くより外に手段はなかつたのである。

「思ひ断れねば父はお前を殺して死ぬぞよ」の父の諫言こそ、雪子にとつて望みのすべてを縛められた嚴重の鎖である。無理に切らうとすれば身を切るより外にない。

今は只辛さ、切なさに心亂れて、揉搔けば揉搔く程の苦しさを増すのみであつた。

「これも少しの間だ、………後には屹度一緒になる………」  
 の、頼りない一言を頼りにして見ねばならぬ哀れの境地に居たのであつた。

斯かる内にも結婚の日は近づいた。  
富谷家にてはその準備の爲め、上を下への混雑を呈して居た。

石田家にては縁戚の關係上、手傳として行かねばならぬのであつたが、折悪しく母は産褥にあつたので、その代理を雪子に勧めたのであつた。

「お雪！ お前！ 御苦勞でも、富谷さんへ手傳ひに行つてお呉れでないかい……」

「御母さん！ 私に？……」

「あゝ、何うぞ、行つてお呉れ！ 本来なら御母さんが行かねば濟まないのだけれど相憎と未だ床を離れる事が出来なから……」

「だつて……私……厭だわ……今迄なら行きますが……もう今日となつては……」

「お雪！ いつまでもそんな没分曉を云はずに御母さんの代りになつて行つて」

御呉れよ」

「だつて……妾……」

と、雪子は、飽くまでもこれを厭ふたが、遂に母の命令に従はぬ譯には行かなかつた。雪子の心は辛かつた。

それに恒夫も云つた。

「お雪さん！

貴女は今、身重になつて居ると、専ら世間での風許ではないですか。今、貴女の自身の身を晴らすのは此處です。

自分の身の淨い事を皆に見せる爲め、是非に来て手傳つて下さい……」

恒夫の言葉は尤であつた。

雪子は遂に一つには母の命と、一つには純白を見せん爲の我が身の吩咐に仕方なく手傳として行く事になつた。

二月三日！ これぞ、恒夫が、一生の慶事たる結婚の當夜であつた。

「所は高砂の……尾上の松も年経りて……」

秘密はすべて互ひの胸に包んで、芽出度式は済まされた。

「その時の、お雪さんの働き振りは目覺しかつた」

とは、其の式に列つた人の直話であつた。

その翌日、雪子は叔母お朝の家を訪うて前夜の模様などを物語つた。

「妾 昨夜ほんとに厭だつたわ！ だつてね！

お嫁さんの振袖を、私に似合ふだろうつて着せやうとするんですもの、妾振

袖は着たいが、この振袖は着たくないと言つてやつたの！

それにあの慶太郎様がね！ 妾が水汲みをする時、雨が降つて来たので、恒

夫様が傘を差し掛けて呉れたら、變な目付をして見て居たの！ それに叔母

様！ これは手傳の御禮だつて寄越したの」

と、鼠縮緬の羽織を見せたのであつた。

32 悶ゆる心

恒夫が、雪子を捨てぬとすれば何故に結婚したのであらうか？

明け暮れ優しくさるゝ妻に對して雪子を離別すべきその心は動いた。

恒夫は遂に心を鬼にして強硬に、最後の通牒、情交斷絶の巨弾を放つたのであ

る。

私は到々意を決して此の度の事を葬る事にしました。そして、この事を御  
叔父上様にも確と手紙を以て御通知致しました故、今明日の内にお話があ  
るでせう！ 貴女は、如何御決心なさるか知りませんが、決して淺果な  
事をして終身取りかへしの、つかぬ様な事のない様一寸愚見を書き添へま

した。また書きたき事は山々ありますが、心は決して思ふがまゝに書く事は許さず、此の上は御賢明なる貴女のお考へにと御願ひします。事の意外に、読み終るや、雪子は、手紙を地に投げつけて痙攣する口元を噛みしめた。

「あゝ、何たる無愛想な書振だろう！ 妾は愚か者であつた。今日の今日まで騙されて居たのだ……思へば、思へば、今迄の事は皆嘘か？ おゝ口惜しい……」

怨みは骨髓に徹した。雪子は夢ではないかとまで思つた。然し夢ではなかつた。茲に於て、彼が理想の殿堂は根底より覆されて了つた。

今は絶望である！ 破碎である！ 闇である！ 死である！ 彼は斯く思つた時、

「何ッ！ 妾にも覺悟はある！」

擡げた顔は鋭かつた。食ひ絞つた齒は堅かつた。

忽ち傍への硯箱より筆を握つた。

夢の間も忘れ難ない恒夫様。

昨夜は御手紙を戴きましたから待ちに待つた、御返事かと取る手も遅しと披き見るにまあ何たる事せう！ 餘りの心の痛手に堪えかねて起きて居

られません故、気分悪しとて皆様の開かぬ中に先に臥床に入つて種々と考へて見ましたが、考へれば考へるほど譯がわからなくなつてしまひまし

た。此の前の逢ふ時まではそんな様子もありませんでしたが、變り易いは男の心と言ひながら、さても餘り早い變り様です。

染谷の叔父様は何と申されたのですか、又財産が欲しくなつたのですか、貴君は立派な男子ではありませんか、一日誓書した事をさう易く破るとは

一度ならず二度迄も、妾はかよい女ですが、一度誓ひし事は何處までも

成し遂げる心算です。  
 去年の秋から、母の云ふ事に反いたのも、貴君の検査が免るゝ様と誠心罩めて祈りしも、皆、貴様と添ひたい爲め、これ程思ふ妾を振り切り見捨てて行きますとは、如何に男心でも餘り御心強いではありませんか、三年此の方百餘回樂しき逢瀬を重ねつゝ堅く結びし縁の糸を只一片の手紙にて断切るとは餘りむごいお爲され方、それも手立のつきし上なれば兎に角、何等の事も爲し得ず、いざとなれば前に云はれた其時にきつぱり断念めてしまいます。  
 断念よと云はれても、悪しと思ふ事も出来ず、尙いやまさる愛着心！ 貴君は戀に打ち勝つた強者でせう、妾は勝つ事の出来ぬ弱者です。その弱者が、一人失戀の悲しさ、苦しさ、悶えて居るを貴君は見捨て、願見ませんか。

どんな事情があるか知れませんが、今更そんな聞くも悲しい事は妾は厭で御座います。如何に貴君の頼みでもこればかりは、此方から何うぞ許して下さいまし、今度こそは二度と此の様な事は申さないとおれ程堅く誓ひ乍ら皆一時の氣休めなのでしたか。  
 今迄の事を考へると、そうと許りも思ひませんが、名譽も地位も、財産も棒にして迄、妾との誓ひを守ると御言ひなされし故、嬉しう思つて居りました。  
 嗚呼！ 妾は、遂げられぬ戀を致して居つたのでせうか？  
 自分は命をかけて眞實の戀を致して居る筈ですのに、噫、樂しき戀の、悲しき終りとなるでせうか。  
 一生連れ添ふ夫ぢやと母も、許し、自分も心に思つて居たものを、只の一日も夫婦ぢやと晴れて添ふ事成らぬとは、浮世ばかりが無理ではない。矢

張り貴君の罪です。それ程後前考へて大事を御取り遊ばすなら何故に初めに妾にあれ程堅き誓を致しました。

貴君に別れて、何樂しみに世を送りませう。妾を不憫と思はすなら、何うぞ思ひかへして下さいまし。

それも叶はぬ事なれば心許りを殺さずと、體も一緒に殺して下さいまし、戀しい貴君のみ手にかゝりて死ぬなれば、何の怨みに思ひませう。今迄の堅き誓ひも皆仇事になる事かと泣いては怨み、怨みては泣き、夜通しまんじりともしませんでした。

今宵も寝られぬまゝ書き連ねましたが、胸一ぱいになつて思ふ様に書く事が出来ませんから餘は御察し下さい。

呉れく頼み参らすは何卒切なる妾の願、聞き届けて下さいまし。それに對する御返事を御待ち申します。

母への手紙は差上げません。何うして妾が上げる事が出来ませう！ 餘は御目もじの上ゆるく申し上げます。さようなら。

その言ふ處。真情を捉へ來つて、深刻火より熱烈である。この手紙を見て恒夫は何の面目があるであらうか。

33 解けゆく雪

一度雪子に對して秋風を覺えた恒夫は、恰も壊れた風車の如く、如何に雪子が千言萬語！ 筆に頼り、紙に托し、情なき數々を書き送つたが、彼の心には最早何の動きもなく、昨日の愛情の風は、今日の知らぬ他人となつた。

勿論、此れに對して恒夫よりは何の返事もなく、又相逢ふ機會とてもなかつたのである。

怨みと涙とに一夜は明けて、浮世は花に曇る悲しい三月十四日となつた。

この日こそ——この夜こそ——雪子が初めて虚夢の戀より醒て、總ての歡喜と悲哀とを此の世に葬り去つた終焉の日であつた。

一昨夜よりの雪は全く止みて、人の子の斯く惱めるとも知らで、太陽はキラキラと今朝美しくも照り渡つた。

木々の梢や屋根の雪は消えゆく人の運命にも似て、正午頃には名残もなく日蔭の隈に僅かに白い佛を見るのみである。

雪子は庭縁の柱に身を凭せて静かに溶けゆく雪を眺めては人知れず睫毛を拭ふたのであつた。

「あゝ死にゆく身の、もう……何もかも、世の中の一切が見納めだ……」  
斯様思ふ時、何とも云ひ得ぬ悲しさが胸に満ちて、泉の如く涙の湧くを覺ゆる

のであつた。  
静かに目を閉ざると、既往の事が夢、幻と彼の身邊を圍繞いて、暫し我を忘れる。

「あゝ、せめてお祖母様と、お美代さんにたゞ一目……」  
雪子は夢の間にも祖母様やお美代様が懐しくて堪らなかつた。そして再び幻影の底を覗めた。

「だけど……お美代様は遠い處に居るのだし、お祖母さんだつてお美代さんの處に居るのだもの……逢ふたつて、今逢へる譯ではなし……あゝ、たつた一目！ 一目で宜いが……寫真でもないか知ら……」  
雪子は斯様云つてほろりとした。

「あゝ、もう、何も思ふまい……」  
雪子は再び目を閉ぢた。



幻影を逐ふ、その顔は蠟人形の様に美はしかった。  
雪子は、目を開かうとはせぬ。  
凝と、凝と閉ぢて居る。

あゝ何を思つて……何を考へて……

今にして思ふ、その二十年の夢は實に永かつた。又儂くもあつた。

楽しくもあり、又、嬉しかった。

口惜しくもあり、又悲しかった。

「あゝ、今では昔となつたけれど、庭先でお美代ちゃんと遊んだ頃が戀しい……

……。

あの時は、あの定一様も居た。

あの松の木の前根元に、土を盛つて、お父さんのお墓よと、お美代様に董など  
を取つて來て貰つて、手向けた事もあつた。その頃の定一様は無邪氣で嬉れ

しかつた。

僕！ 今に陸軍大將になつて、お雪ちゃんのお父様の仇を討つてやる」  
と力んだ姿は、今でも目の前にちらついて見える。

「恒夫様！ そう、あのひと、繩を縛つた時、木の葉を掻きに行つた時、又、

水戸や土浦へ行つて、膳を共にした時の羞かしくも嬉しかった。

又、その頃の恒夫様は實に優しかった。

あゝ其頃の誠だにあつて呉れ、ば……」と雪子は又しても涙に光る睫毛を拭  
ふたのであつた。

「お雪様！」

ふと後より聲を掛けたのは森之助であつた。

「お雪様！ 何を呆然、考へて居るんだね……

俺やこれから菖蒲澤へ歸りますが……お祖母様かお美代様の所へ何か用事

はありませんかね？」

「エッ！ これから歸るの……有る！ 有る！ 澤山言傳があつてよ！」

雪子はふと身を起して居間の方へ立つた。

森之助は草鞋穿のまゝ、案山子の様に突イつて居た。

### 43 糸の切れ目

「森様！ 濟みませんが……この手紙をお美代様に渡して下さい！ 忘れてはいやですよ。そしてね！ 決して人の手に見せてもいけないのですよ……」

「大丈夫そんな頼まれ甲斐のない俺ではありませんからね！」

「オヤ森様今日は乙だわね？」

一人で深い惱みに沈んで居た雪子も斯様して話相手があると幾分心が開けるのであつた。

「森様！ 妾し今、貴方で思ひ出しましたが、この指輪は貴方に借りたのでしたね、ほら恒夫様に妾が貰つたのを、何處かへ失してしまつたでせう、あの時、森様に借りたのよ、もう、妾、指輪なんかちつとも簞で居たくはないからお返ししますわ！ このハンカチは、つまらないんですけれど、ほんのお禮の代りに……」

「お雪様！ 俺や何んにも入りませんよ！」

その指輪だつて別に要る譯ではありませんから簞で、好う御座んす」

「森様！ 有難う、だけでもね、妾もう、指輪なんか、簞で居ても居なくとも同じ事なの」

「それは又、何う云ふ譯で……」

「そう聞かれても話は出来ないけれど、妾、最う指輪なんか箆て居られないんですもの……」

「はめて居られない？ だつて今迄箆て居たんでせう！ それなのに……俺には何うも……」

「森様がいくら考へたつて分りやしないわ！ それよりか早く家へ歸つて、お美代様に聞いた方が早いわ！」

「ヤレ、ヤレ、それじや矢つ張り菖蒲澤へ歸らねば解らないのかなア！」  
半ば道化交りに云つて森之助は去つた。

雪子はその後姿の見えなくなる迄見送つて居た。と、突然  
「お雪や」

と、聲がしたので、ふと振り返るとそれは母が呼んだのであつた。  
「あの機巻を手傳つて御呉れ」

「はい……」

と雪子は下り立つた。  
都喜子は庭の彼方より此方へと機糸を張り廻した。そして、雪子と二人で、面倒にも一本、一本と糸を直して、梭の中へ潜らせる。

それが終ると元の方より巻き初めるのであつた。

雪子は切ない胸の中を幾度か母に打ち明け様としたが、死出の障げとなるを氣遣ふて胸中深く之れを秘した。

然しその心を仄めかさぬ譯には行かなかつた。

「お母さん！ この機糸ね！ これをぶつつり及物か何かで切つてしまつたら  
お母様は何う思つて……」

「おやお雪はつまらない事を云ふ娘だね！  
お母様はね！ お前や子供等の事を思つて居る事はあつても、そんなくたら

ない事を考へる暇はないのだよ……」

「だつてね……お母様……この機糸だつて妾等だつて同じ事ですわ……云はゞ、妾は、刃物でぶつ切り切られた機糸よ……何うにも仕様がないでせう……これも妾は、因念事だと断念めて居ますが、立派に織り上げ様と思つて丹精を凝らした人の心を思ふとね……妾……何だか濟まない様な気がするの……」

「お雪……お前は又、そんなつまらない事を云ひ初めたのね……そんな愚にもつかない事はよして、さア最う少しだ……手傳つて御呉れな……」

「はい……」

雪子は、母の命のまゝに織糸を繰なしたが、その手先は怪しく慄いて居た。

35 謎 の 石

築庭の芝生あたりには未だ雪が大分残つて居た。機巻を終えた雪子は、又しても、庭縁に腰打ち掛けて茫乎築庭の方を瞶めて居た。と、何か見付けた様に足を前に運んだ。

築庭には大小無数の石が散らばつて居る。雪子は其の中から林檎位の石を幾個か拾ひ取つた。そして井戸流しへ行つて窻つと洗ひ淨めた。

「姉さん！ 何して居るの……」

お春さる様に聲をかけたのは、今學校より歸つて來たばかりの妹てい子であつた。てい子は、雪子とは胤違ひの乳姉妹ではあるが顔貌はよく雪子に似て居つた。年は未だあどけない十四であつた。

「おや！ てい子や！ 最う學校から歸つて來たの……」  
 「そう！ 今日はね！ 裁縫がなかつたから一時間程早く退けたの……」  
 姉さんその石は何なの……」  
 「おほ、この石？ これは少し譯があつて……」  
 「譯つて何アに……」  
 「それはね！ 少し話をしなければ分らないがね……姉さんが小さい時、お美代ちゃんだの、谷向の定一さんだのして、この庭先で御慕ごつこをしたのこの石はその時お父様の石碑の代りにした石なのよ！ 妾、今ね！ それを思ひ出したから、記念に洗つて藏つて置かうと思つて……」  
 「おや！ 姉さん！ そんな事があつたの……」  
 てい子は、昵と築庭の方を瞞めて、未だ見ぬ古い夢の跡を偲ぶらしかつた。  
 「てい子！ 妾、何だか甘いものを喰べたくなつたから！ 濟まないけれど……」

……一寸買つて來て呉れない？……」  
 帯の間より赤い金巾を出して二十錢銀貨を一つ渡した。てい子は銀貨を渡さる儘表の方へ走り去つた。  
 臆て歸り來つて庭縁に風呂敷から擴げたのは赤い青い餅菓子であつた。  
 「さア皆んな御上り！ 姉さんの御馳走よ……」  
 雪子は斯様云つて、てい子を初め、妹や弟を呼ばつて小さな掌に幾かづゝを摘んで渡した。  
 やがて絶ゆべき、切ない姉の胸中を知らぬ、無邪氣な妹や弟等は、たゞ、甘い甘いと舌鼓打ちつゝ喰べたのであつた。  
 「姉ちゃんが何時も今日の様だと宜いな！」  
 一番末の弟は云つた。  
 雪子は針を刺さるゝ思ひで居たが、

「これ！ 皆のものよ……」  
と、云ひまぎらはした。

「お前等はね！ これからお父様や、お母様や、云ふ事を聞いて大人しくして居るんだよ、もしもね！ 姉ちゃんは何處かへ行つたとして、その後で喧嘩何んぞしてはいけないよ！ 人に笑はれるからね……」

「姉さん……大丈夫だわね！ 喧嘩なんぞしやしないわね！」  
てい子は弟の顔を覗きながら云つた。弟は肯いたが、大いなる姉の謎は遂に解けなかつた。

「てい子！ 誠に濟まないがね……今日だけ炊事の方をやつて御呉れな！」  
「ハイ、今日から毎日でもやります！」

「では、てい子！ 妾、頼んだわ！」  
「え、妾！ 急ぐやるわ！」

てい子は、襟姿いそしくも台所の方へ去つた。次の妹も弟も、ていでに己が向きく離れ去つた。  
永からぬ春の日は納屋の後ろに傾いて、其處此處の釜場より薄紫の煙が立ち上る頃、雪子は己が居間へと入いつた。

### 36 怨恨の鐵

雪子は今、自分の居間の箆筒の前に居る。

そして二棹に餘る——箆筒の中の——衣服を整理して居た。

「この着物はてい子に、この羽織はお美代さんにおげやうか」

雪子は一々、手に取つて見て眺めながら涙ぐんだ。

「この衣服は……妾が御祝儀の時着る様にと御母様が仕立て、置いて下さつ

た……それを妾は……何て斯様親不孝に生れたのでせうね——』  
と急にほろりと熱い涙が落ちた。悟られてはならぬと、袖で涙を拭ひ、その白無垢を上うへの箆筒たんすの抽斗ひきだしの中へ假かりに入れて置いた。  
雪子は間もなく夕食を済まして、叔母の雜貨店へ行き、封筒と半紙とを買求め、五十錢銀貨一枚を渡した。

『お剩錢は後でいゝの……』

と、其儘家へ歸つた。そして再び己が居室に入つて机に對つたのであつた。其時母の都喜子は氣分が悪いとて炬燵にまどろんで居たが、雪子が一心に手紙を書いて居るのは先日せんじつの返事でも書いて居るのだから、たまに聞ゆる鼻すゝりも左程氣にも止めなかつた。  
雪子は母と隔ての障子を閉めて、凝つと一と間の机に凭れて、又しても恨みと悲しみに泣いた。泣いて泣いて泣き止んだ時、雪子はやをら身を起した。狂は

しくも髪の毛のほつれ下つた顔には、何か決する色があつた。  
いつその事恒夫の身を劈いて今生の諦めを得ようと思つたのである。  
ふと机の抽斗より自分と恒夫との二枚の寫眞を取し出した。涙に腫れし眼は凝つと、凝つと、之れを打ち睨んだ。此の時、彼が怨恨の一念は、右手に持つた火箸を以つて、我と彼との咽喉部を目蒐げて、ズブリと刺し貫き取り取つた。  
力を籠めた手は慄え、笑みを含んだ雪子の顔は怨魔の如くであつた。  
『死にゆく身は只一人なれと實は斯くの通りである』と、  
人を呪ひ、世を呪ひ、怖しい最後の止めを刺した。  
彼は遂に虐げられし戀の前に呪ひの鬼と化したのである。

×  
やがて血と涙と怨みと悲しみとは三通の遺書を書かした。封筒に之れを嚴じて御兩親様、恒夫様、慶太郎様、と各自宛名を記し終るや、曾て郡長より賞賜

された榮ある硯箱に藏め、その筆と差し櫛とを煙草盆の中へ入れて置いた。そして、再びお朝の家を訪ふたのであつた。

「叔父さん！ お朝様は……」

「お朝か？ 今、一寸用達に行つたが、急ぐ歸つて来るから、まア中へ御入り！」

「はい……」

と、雪子は云つたものゝ、留守と聞いて力を落したらしかつた、

「それじゃ、妾、宜いわ！ あの髪を結つて貰はうと思つて來たのだが……」

それじゃ、妾、宜いわ！」

雪子は其儘引返した。

程なくお朝は歸宅したので急ぎその跡を追ふて來た。

「お雪や！ 今、家へ來たそうだが、何か用があつたの……」

「なアに、髪を結ひ直して頂かうと思つたのですが、今夜は遅いから宜いわ！

相憎風呂も立たないから妾體を拭いて済ましたわ！」

死に行く身は飽まで清淨にし様と思ふたのである。

斯くとは神ならぬ身の知るよしもなかつた。お朝は、

「お雪や！ 先刻手紙を書いて居たと云ふが、返事は……」

何の氣なしに訊いた。

雪子は、

「來ないわ！」

と、云つたが、又、

「明日になると分明るわ」

と、云ひ捨て、外にお朝が居るにも拘らず、内よりピツシリと戸を閉めてしまつたのである。



お朝は左程氣にも止めず歸つて行つた。  
時計の針は小止みなくセコンドを刻んで、静かな家に八時を打つた。運命は數刻の後に迫つた。あゝその音……その響……夜は刻々と更けて行く……。

37 最後の夜

雪子は心ならずも叔母と別れて家に入つた。  
父は夜警の當番にて詰所へ行き、妹等は皆もう寢に就いて温かき夢路を辿つて居る。

母の都喜子は床に横はつて居たが、咽喉が喝いたのであらう。  
「水を……」と所望せられたので、雪子は「はい！」と答へて台所に行き、洋盃に満々と汲んで、これを進めた。都喜子は、

「あゝ！ 甘い、甘い……」  
と舌打ちして飲んだのである。  
甘からうぞ！ 子が末期の水ぢやものを……。  
そして雪子は闇に響く照光寺の鐘の音を聞いて床に就いた。  
しかし、怨に悶ゆる身の、いかで安らかに眠り得やうぞ！ 況して、今宵は覺悟の身！

あゝ！ 淡雪の運命儚なくも、明日は昇る朝日と共に消えゆくぞと思へば、胸は彌が上に焦立つて、眼は冴え冴える。  
凝然、寢息を耐せば、桁走る鼠も音を潜めて、夜は深々と更け渡り、萬籟は深き眠りに落ち、聞として何の物音もない。  
父であらうか！ 夜警の拍子木の音のみ遠く聞ゆるは。母はと障子に耳を聳つれば、我が子に斯かる覺悟のありぞとも知らず、夢安らかに微かに鼾さへ聞ゆ

る。  
 雪子は窃つと蒲團を抜け出で、身仕度に取りかゝつた。衣類は夕刻箆筒を整理する際出して置いたものである。  
 白い長襦袢に綸子の白無垢を重ね、同じく白綸子の帯を締めて、白のハンカチを咽喉に巻き、白足袋を履いて、散るべき花は飾られた。  
 靡げなる電燈の下に立ちたるその姿は、草間の百合か、星に照る白梅か、否々、やがて朝日に解くるを思へば、闇にしるき淡雪であらう！  
 雪子は窃つと障子越しに母の枕邊に跪いて、二十年來の永い御養育の恩を謝し、先立つ不幸の罪を心に詫びて平伏した。熱涙はハラ／＼と頬を傳ふて疊に燦めいたのである。

「さうば！ お母様！

これにてお別れいたします、親に先立つ不幸の罪は幾重にも御詫びいたしま

すけれど……けれど……この不幸の身を御憫れみ下さいませ、……妾は、もう……今は怨みも何もありません……  
 さらば！ お母様！ 妾はこれから懐しい父の許に参ります。そしてあの世とやらで、楽しく暮します。随分御身體を御大切に……」  
 微かに小聲に云ひ終るや、袖に顔を掩ふてしまつた。  
 聲立てじとすれど、

「よ、」

と聲の漏るゝに氣を取り直して立ち上つた。そして人目につくを厭ふて、先夜富谷より貰ひ受けた鼠縮緬の羽織を白無垢の上に羽織つたのである。  
 しるき姿の戶外の闇に現はれし時、夜警の提灯は門を過ぎた。雪子は意を決して足を運んだ。

一歩出で、は一歩退き、低徊去るに忍びなかつたが、思ひ切つて門を出でた。

路傍の残雪は夜の裾を抹せど、死の領に續ける闇は廣く、石を入れたる袂は重  
い。  
運命の道を歩む鐵の如き足、一步出で、は一步、ともすれば躓く石によるめか  
んとするのであつた。

あゝ、右に左に我が家を返り見した事は幾度であつたらうか。

磁石の如く闇に吸はれて行く事、一丁餘にして、富谷家の門前に出でた。

雪子は潜戸より中へ入つて、安らかなる恒夫の夢を呪つたのである。そして怨

みに燃ゆる涙は、此處にも血と降り雨と濺いだのであつた。

羽織を袖疊みにして門側に向け、下駄を井戸の前に並べて、ヴェールにて顔を

包み、白紐にて股を結えた。

かくして雪子は従容として井戸端に立つたのである。

この一瞬の断末——彼は人生の絶壁に立つたのだ。

一死は深き九仞の底、洵然と身を躍らした時、飛沫は天に沖して星あまた崩れ  
飛んだ。

あわれ！ 闇に散つた一輪の花は、生まれた儘の清さにて千萬年後に散つて了  
つたのである。嗚呼！！

### 38 行衛の闇

悟れば世の中の總ては夢である。われ等の一擧手、一投足は皆夢の斷續に過ぎ  
ぬ。

夢に生れて夢に死ぬ……實に雪子の生涯も果敢なかつた。永い二十餘年  
の夢も、歸する處たゞ一夜、一時にして醒めてしまつたのである。

父の、母の、叔母の、祖母の、妹等の、目覺めて此れを知つた時、たゞ夢とし

か思へぬのたろう？ 實に彼れの行爲は夢中の夢だつたのである。  
 間漏る風の冷やかさに都喜子はふと目覺めた。鈍き視線を雪子の部屋へ投げる  
 と、死人の如く押入より垂れ下つた新聞紙が視線を遮つた。と、其下に雪子の  
 蒲團が紙の如く平かなるに氣付いた。  
 枕はあれど髪が見えぬ。都喜子は不思議の餘り呼んだ。  
 『お雪や！ お雪や！』  
 呼べど何の應へもなかつた。

『何うしたのたろう！』  
 斯様言つて床を出でた。電燈は布を纏ふて室は臆である。  
 雪子の部屋へ足を進めた都喜子は、  
 『オヤ？ 居ない』  
 と、頓狂な聲を發した。

ふと寢床に手を當てれば、常衣が袖疊に入れてあつて温りとてもない。それは  
 雪子が脱出してより何時間かの後の事であつた。

『もしや……』  
 と、ふと胸を突いたものがあるので、都喜子は急にてい子を呼び起した。  
 『お母様……何アに……』  
 『何にぢやない！ 姉さんが居なくなつたんだよ！』  
 『えつ！』  
 てい子はムツと刎起きて、都喜子の側に來た。

『姉ちゃん！』と呼んで見たが返事がない、二人は彼方此方を搜した。  
 かくすること暫し、都喜子は、  
 『てい子や、兎に角お父さんとお朝の處へ知らせて御出で……』  
 都喜子は斯様言ひながら小さい子供等を呼び起した。